

スミオ

緑町優

1

スミオとは言わば幼馴染みだが、いつ知り合ったという覚えはない。不審者による子供の誘拐や傷害事件が頻々と起こるようになって、集団登校というかたちで、近所の子らが集合してまとまって登校するようになった時に、いつの頃からかその中に入っていた子だった。変な大人にねらわれるなんて状況を、あたしはせせら笑って聞いていた。この時、あたしはもう六年生で、背丈も体格も周りの子より抜きん出て大きく、そんな変な大人が近寄って来るなんて覚えも何もないから、想像もできなかったが、一緒に学

校へ通う児童の中でスミオを見た時に、ああそうか、こんな子だったらと思ったのだ。スミオはそれくらいきれいな目をひいていた。髪もさらさらで歩くとなびくくらい長かったから、暫くの間は女の子だと思っていた。白い半袖の開襟シャツや黒い半ズボンも男の子用とも見えたが、今時そんな格好の女の子も珍しくないし、とにかく一団の子供の中では美しさが際立っていたから、男子とは思ってもいなかった。半ズボンから出た脚も華奢で、太さもあたしのスカートの下の脚の半分くらいしかなかったし、声や仕草、動きも優雅でやさしく、その同級生の女の子が、なつかわさん、と呼びかけているのを聞いて、ああ、夏川とい

う子なんだとそれだけ知れた。

その夏川さんはあたしに興味を持ったようだった。いつの間にか、すぐ脇に近づいて、上目づかいにこちらを見て、一寸顔を赤らめながら下を向いて、すぐ後ろについて歩くのが習いとなったからである。近くで見て、本当にきれいで、我が身をひき比べてがっかりしたものだった。色も浅黒く、造作の大きい耳鼻や口のあたしに比べて、夏川さんは好ましい卵形の顔に大きな目、小さい鼻や口元、形の良い耳、透き通るような白い肌で、こんなきれいな子もいるんだと嘆息した。

この夏川さん、実は夏川君、スミオという名の男の子と知ったときには、あたしは絶叫して、ほとんど絶望した。冗談じゃない、あたしの立場はどうなるんだ！ しかし夏川スミオは親愛の情を見せて、歩きながら話もすると、きれいなだけじゃない、心もやさしくて、自分のことを少しも鼻にかけないいい子だということがわかって、あたしも悪い気はしなかったが、こんな美しい子に対して、自分はどうしてよいのかわからぬ、何とも釈然としない気持ちはずづいていた。

あたしは喧嘩も強くて、近くの男子とやり合ってもひけを取らなかった。戦績は七勝一敗二分け。先制攻撃で七勝をあげていた。奇声を発していきなり掴みかかって突き飛ばし、スカートから跳ね上げた足で蹴とばしてやると、ふ

つうの男の子はもうそこでやる気をなくして、さらに立ち直るスキを与えず殴る蹴るして、大体これでこっちの勝ちだった。但し、向こう三丁目の隆志は体も大きくて、あたしの先制攻撃を身を翻してかわすと、にやと笑って構えた姿はもう一分のスキもなく、この時点で負けを覚悟した。果たして殴りかかったが、カウンターを食らってびっくり返ったあたしは、一応立って身構えたが、もう戦意を喪失していた。隆志はつまらなそうな顔でぶいと横を向いてそれでおしまいになったから、見た目は引き分けだったが、この男にはもう勝てないと思って引き下がった。決着がつく前に止められたことが二度あって、七勝一敗二分けというわけだ。

あたしの強さはよく知られていたから、スミオをいじめようとしたり、からかう奴を脅しつけると、さすが退散するようになって、いつの間にかスミオを守る用心棒のようになってきた。だがスミオにちょっぴり出ず男の子、それに女の子も、その美しさにひきつけられて、裏返しで意地悪に及んだりするのだということもわかってきた。こっちはどうせ損な役回りだが、このはかなげな少年が好きになってきて、それもいやと思うようになっていた。当時スミオは五年生だったが二月生まれで、四月生まれのあたしとは二年の差があった。お姉さん気分、もっと保護者のようにも感じていた。

帰り道で二人きりになったことがあって、スミオをうちに連れて来た。うちはアーケード街の中でそうざい屋をやっている、夕方へ向けて忙しくて、両親はいつもあたしを放ったらかしだったので、退屈のぎにスミオとゆつくり話してみたくなったのだ。店の前で母さんにきちんと挨拶したスミオの美しさに、目を丸くしていたのがわかった。当然年下の女友達と思つたようで、それなら都合がいいやと知らん顔をして、スミオを裏口から上げて二階のあたしの部屋に入れた。

スミオはおそろおそろ入って来て、入口で正座して中のあたしを見上げる。それから少しあたりを見回して、何ともがさつな室内にあきれたのだから、そんな風も見せず、いつもの少しほえんだやさしい表情で、

「女の子の部屋に入るの初めてなんです。ごめんなさい。失礼があつたら言つて下さい」

礼儀正しくそう言つて、また少し周りを見る。何だいな女の子の顔してさ。あたしの部屋見て、女の子の部屋初めてだなんて皮肉を言つてんじゃないよ、と急に意地悪な気持ちになつて、

「スミオ、こつちへおいで」

と少し呼び寄せる。耳元で何か囁くふりをして、耳たぶに一寸かみつく。スミオは目を開けてのけぞる。その仕事が大げさに見えて、また少し癪にさわつて、

「おまえ、きれいだよな。本当は女の子じゃないの」
スミオがこの頃よく、「おんなつ子」などとかからかわれていることを知つた上での意地悪である。

「違います」

泣きそうな顔をする。その顔がまた可愛くて、
「でもさ、女の子でもおまえよりきれいな子いないしな」
「もう止めてください」

あたしは自分の城に獲物を啜え込んだ気になつてしまつていた。次々と残酷なアイディアが湧いてきた。タンスから三、四年生の頃に着ていた、もう丈が足りなくなつて着なくなったワンピースを出してみた。白地に紺の格子柄の入った、近所の店のおばさんが、あたしの横幅が大きくて、ふつうの女の子用の既製品が全然合わないのを見かねて、ホームメイドで作ってくれたものだった。

「これ着てごらん。おまえに似合うんじゃないの」

スミオの黒目がちの大きな澄んだ眼が少しうるんで見えて、さすがにあたしも悪かつたと思いはじめたところで、スミオは坐つたままそのワンピースを取つて服の上からかぶつてしまつた。びっくりした。その形の変なだぶだぶのワンピースが、スミオが着るときれいに見えた。正直感心して、

「びっくりしたあ。本当にきれいだよ」

スミオは立ち上がつて、腕でだぶだぶの身幅を少し寄せ

ると、それから少し裾を揺らして歩き出した。振り返つて一寸首をかしげてほほえんであたしを見る。啞然とした。

スミオは自分の美しさをよく知つているんだ……。あたしは必死にあやまつた。

「スミオ、ごめん。ごめんよ。あんまりきれいで悔しかつたんだよ」

スミオは、

「かつこさんの方がずっと元気が良くて輝いているのに。僕はずつとかつこさんが羨ましくて、いいなあつて思つていたのに……」

あたしは虚をつかれて、涙が出そうだった。

それから時々スミオはうちに来るようになった。ある時にまたいたずら気をおこして、明るいレモン色で上半身はすらつと細く、裾はふわつとして優雅なワンピースを着せてみた。三つ年上の従姉からのもらい物で、あたしにはまともに着れなかつたそれが、スミオにぴったりだった。たまたまその場面を、ジューズを持って上がってきた母さんに見られたが、

「まあ、きれいな子はいいわねえ……」

と感心しながら階段を下りていった。そこで、スミオをその格好で外へ連れ出すことを思いついた。あたしの古い麦わら帽をかぶせ、水色の運動靴をはかせて、スミオを通りに連れ出した。嫌がるかと思つたが、大人しくついて来

たスミオの表情は明るくて、少しはにかみながらも嬉しそうだった。その姿は上品で麗しい少女にしか見えなかつた。アーケードを抜けて川辺りまで行つて、河原で少し遊んだ。柔らかな日ざしを浴びてスミオの体は絵本の中の妖精のように輝いていた。それから川に沿つて歩いて、帰り道は林の中を通つた。スミオは突然、おしっこがしたいと言出した。あたしは近くの木の陰へいざなつて、

「立つてしちゃだめよ。女の子なんだから」

少し厳しく言うと、スミオは泣きそうな顔になる。

「しゃがんでお尻のところまくつて。パンツ下ろす前にスカート前に回して持ち上げて、ぬれないように気をつけて……」

一緒に歩きながら、すれ違つていく人たちが皆スミオのことばかり見ていることに気がついて、美しいスミオの引き立て役に回つたことに、少しむくれていたあたしにほんぼん言われて、スミオはぎこちない動作でおしっこをした。あたしはその様子を盗み見た。たしかに、小さな鉛筆みたいなものが出て、その先からおしっこが出ていた。本当に男の子だったんだと、安心のような残念のような、不思議な心地がした。

あたしが中学に上がってからは通学コースが違って、スミオとは縁遠くなった。さらにスミオが中学に上がってからは全く会わなくなった。中学校でも見かけないのでどうしたのかと思ったら、スミオと同級だった子が、あいつ私立へ行っただ。駅からバスに乗って通っているらしいよ、と教えてくれた。これでもうスミオとは縁が切れたと思っていた。あの日のことを思い出して、悪かったとあやまりたかったが、その機会は来なかった。それが心残りだった。母さんの口から突然スミオの話が出たのは、中学二年も終わりの頃だった。

「以前うちへ遊びに来てた子、なつかわっていうんだろ」「そうだよ。夏川スミオというの」

「すごい美少年って噂話に聞いてはいたけど、うちに来たあの子とわからなかった。女の子と思っていたから。あんな、男の子にワンピース着せたりして」

あたしは舌を出して、
「あんまり可愛いから。でも似合って素敵だったでしょ」

「とても体が弱い子で、今は学校へも行かず、うちで寝たり起きたりしてるっていう話だよ。おまえ知っていたの」「えっ」

あたしは絶句した。

「見舞いに行つてあげたら。おまえは仲が良かったんだから」

母さんが近所の人から聞いたという住所の書きつけを持ってスミオの家を訪ねた。二丁目の、うちからは五分くらい離れた少し坂道になったところ、しかしメモの場所に建っていたのは、別の難しい名前の表札の出た立派なお邸だった。あれっと思つて、折良く通りかかった人に聞いてみると、

「ええ、そこですよ。なつかわさんは」

改めてその表札を見ると「撫川」となっている。あたしは初めて、これでなつかわと読む、彼の苗字が夏川ではなくて撫川であることが知れた。

門のところのインタホンを押すと、答えてくれた声は懐かしいスミオのものだった。

「ええっ、かつこさん！ すぐ行きます」

弾んだ声が出て、間もなく門から十メートルも先の家の扉が開いて、中学生らしい白いシャツに黒い長ズボンのスミオが現れた。近づいて来た彼は、確かに背丈は伸びて見えたが、顔立ちは少しも大人っぽくも男っぽくもなく以前のままだった。というより、一層すっきりとはっきり美貌といえる顔立ち、抜けるような肌の白さにまたびっくりした。門の格子扉の鍵をはずして、

「どうぞ」

と声をかけて中に誘ってくれた。玄関に入る。初めて見るスミオの家の豪華さに驚いた。立派な大きな木の下駄箱

の上に置いてあるものは少ないが、置物一つ、花瓶一つそれぞれが、あたしでも飛び切り高価とわかるものばかりで仰天した。スミオんちはこんなにお金持ちだったんだ……。そういえばあたしと違って上品だとは思っていたけど。スミオはまた、

「どうぞ」

とほほえみながら手招きする。廊下に行くと少し奥の部屋へ案内してくれた。そこは中庭に面した応接間だった。午後の日の光がさしたガラス越しに見える庭の景色は、目にしみるくらい美しく、あたしはそわそわしながら見とれて立ち尽くしていた。スミオに、

「ねえ、そこに腰かけて」

と言われて、今までに坐ったこともない上等な椅子に腰を下ろして、何かかえって居心地が悪くて落ちつかなかった。

「かつこさんはやっぱりお元気そうですね」

「スミオ、体が弱くて学校へ行っていないって聞いたの。本当？」

「うん、僕は病氣なんです。よくわからない何とかがって長い名前の」

「……全然知らなかった。ごめんね」

「ごめんね、だなんて。小さい時からおかしかつただけで、中学に上がってから大病院で見てもらつて、体のい

ろいろな異常がわかつて。……でも、これは治しようのない病氣だつて」

あたしは絶句した。少し目を見て聞く。

「今、治療しているんじゃないの」

「とにかく養生してって言われて。様子を見てもらっているんです。血が薄くて、量も足りないみたい。体中が虚弱みたいで、学校でも二回気を失つて。三か月くらい前からずっと長期のお休み中。お父さんお母さんもお仕事で出ているから、昼はひとりでお留守番。かつこさんが来てくれて本当に嬉しいよ。ありがとう」

やさしい笑顔に見とれてしまった。血が薄いって、それでこんなに肌が透き通るように白いのだろうか……。

「今、こんな話して大丈夫なの」

ふと心配になって尋ねると、

「うん、急に動いたりしなければ。でも本当に退屈なの。時間があつたらいつでも遊びに来て」

スミオの真剣な表情にあたしは頷いて、一時間くらいで帰った。

それから、一週間か十日に一回くらいスミオのところを訪れた。しかし、一度は体調が悪いからと会えず、体は弱っていくようだった。歩くのも何かおそるおそると見える日もあった。

あたしは本を持って行ったり、新しい面白いおもちゃを

見つけると、そんなものを持って行ってあげたりもした。スミオは自分で勉強しているらしく、いろいろなお話をよく知っているのに驚き、感心した。学校なら優等生なんだ……。

通って二か月くらいたったときに、初めて二階の彼の自室に入れてくれた。ふつうのベッドではなくて、腰のところから傾斜のついた無骨な病院のベッドのようで、あたしは息を呑んだ。

「これだと起きるのに楽なんだ。時々辛いことがあるから」胸が痛んでどうしてよいのかわからない気持ちになつていた。どうしてスミオにそんな病気が取りついたらんだろう。こんないい子に。あたしは悔しかった。

勉強机のそばで少し坐って待つと、隣の部屋へ消えたスミオは、ベージュ色の長いワンピースのような服を着て現れた。その姿にびっくりすると、

「今、うちでふだん着はいつもこれ。でもこれは女の子用じゃないんです。ちゃんとした男性用のネグリジェ」

ネグリジェという言葉にあたしが少し顔を赤らめると、「ネグリジェって、もともとふだん着とか部屋着ってことなの。ネグリジェは、自由なとかかわないって意味のフランス語。ほら、ネグレクトって英語にもあるでしょ。無視するとか、ほったらかしにするとか、あれと同じ語源の言葉なんだって。今ね、トイレでいつもこれで、裾まくっ

うな簡単なものではなくて、本格的というか、あまりに繊細で驚いた。

「そうだ、編み物といえば、かつこさんにマフラー作っていったんだ。よかつたら持つて行って」

そう言っただけで上がると、その動作もゆっくりと、少し辛そうに見えた。あたしが思わず支えてあげようとしたが、スミオは、

「ありがとう。ゆっくりだから大丈夫」

そう言っただけで、部屋の隅の小さいタンスの引き出しから、真っ赤なマフラーを出して渡してくれた。長くて大きなマフラー。編み目が途中から変わって何段にもなった、それぞれが手が込んでいて美しく仕上げられた、店では売っていないような素晴らしいものだった。あたしは見とれて、

「えっありがとう。本当にいいの」

「うん、端のところは名前も入っているよ」そう言っただけでスミオはこの日一番の笑顔を見せた。よく見ると、端のところは藤色の毛糸でさりげなくKATUKOと入っていた。

「本当はセーターを編んであげたかったんだ。でもサイズがわからないし、大きなものに根づめると疲れてきて……、ごめんね。それでかんべんして」

あたしは声も出ずに泣き出した。

「いやだ。かつこさんは笑ってくれなくちゃ」

て腰かけてしてる。立ってるのより楽だから。かつこさんと外へ出て、林の中でおしっこしたことよく思い出している」

「ごめんスミオ、あんなことして。あやまらなくちゃいけないってずっと思っていたんだ」

「あの明るい日ざしの中を自由に歩いていたんだって思い出して。かつこさんはいつも僕にやさしかったから……。そんなに言われると困っちゃうな。またあんなにして一緒に歩きたいなって思っているから」

あたしは涙が流れ出して、もう止まらなかった。

次に行ったときは、スミオはそのネグリジェの姿で刺繍をしている途中だった。見ていると、スミオは長い睫毛の目を伏せて、肩までの髪をほんの少し揺らして、小さな声でハミングしながら細い指先を動かしている。ああ、深窓の令嬢れいじょうってこんな子のことを言うんだ、と夢を見ているように思っていた。

スミオは、

「うちにいると退屈だから。時間がいっぱいあるでしょ。指先だけなら大丈夫。以前は編み物したの。でもあれ、こつがわかると簡単なんだ。もう作る興味もなくなつて今はこれ。こちらはとても繊細で、手間も時間もかかる。僕には丁度いいんだ」

見せてもらうと、刺繍といつてもあたしの知っているよ

赤いマフラーを抱きしめて、無理に笑ってまた変な顔になった。

「ありがとう」

やさしいスミオの声。ありがとうはいつもあたしの方なのに……。

3

中学三年の受験シーズンに入って、暫くスミオの家には行かなかった。スミオに会うのが辛かったし、高校に入學して何かスミオにしてあげられることを思いついたら、また会いに行きたいと思っていた。

高校に入って五月頃、スミオの家に行ってみた。インタホンに出たのは、それまで顔を合わせたことのなかったお母さんだった。女子大の先生、ということだけはスミオから聞いていた。お母さんは家から出てきて、門のところであたしに話しかけた。やはりすごいきれいな人だった。

「あなたが鶴つる見さんね。いつもスミオのことをありがとう。お礼もしてなくてごめんなさい」

「えっ、お礼なんてとんでもない。昔から馴染みの友達ですから。それにこっちの方が……」

と言いかけると、お母さんは少し笑って、

「本当、スミオの言うとおりの元氣そうな人ね。……あ、

スミオね、今日は体の具合が悪くて会えないの。ごめんない」

その悲痛な表情と声音から、スミオの体がもう尋常でないことがわかって、急いでおいとました。

その後はずっと会えない日が続いた。秋になってもう一度自宅に伺ってインターホンを押したが不在だった。胸さわぎを覚えたがどうすることもできなかった。

高校二年になって、四月に思いがけずスミオから葉書が来た。中等部を終わった時点でその私立学校を退学して、五月から少し遠くの病院に入院することになったとあって、病院の名に住所も書かれていた。五月の連休が終わると、あたしは矢も楯もたまず、自転車を駆って病院へ行ってみた。

大きな病院だった。受付で教えられたとおりに長い廊下を歩いて奥まった病棟の陰気で殺風景なところを通って、スミオの病室へ向かった。思いがけず、向こうから歩いてくるスミオと出交した。うす青い浴衣のような病院衣を着て、片手でキャストターのついた歩行用の棒を持ったまま、驚いてあわてながら笑って空いた手を振ってくれた彼を見た時は、懐かしくて嬉しくて涙が出そうだった。

スミオの病室はわりと広い、個室ではないがしつかりとカーテンで区切られた、ほとんど個室同然の二人部屋だっ

た。名札を見たら「撫川澄緒」となっていた。今度も意外だった。葉書にもスミオと書いてあったから、スミオが本名と思っていたのだ。初めて彼の本当の名前がわかった。

ベッドの脇でお母さんが待っていた。スミオは一人でトイレへ行つて戻つて来たところだった。ベッドに帰って、「今日の検査も処置も皆すんだから大丈夫、ゆっくりしていい」

とスミオはあたしを見て手を握ってくれた。白くて細い、弱々しい手だった。あたしはしっかりと握り返して、

「うん」

と笑った。お母さんは、

「鶴見さんもお忙しいところをおいでくださされたのよ。無理を言っちはいけないわ」

あたしでも、それがスミオを気遣って、長居してはいけないのだとわかった。高校生活のことを聞かれて、自分としてはいつになく穏当に答えたが、スミオは羨ましそうに、顔を紅潮させて聞いてくれた。

小一時間ほどおいとました。少し行つて振り返ると、スミオは病室の入口のところで、お母さんに支えてもらつて立つて、また手を振つて見送つてくれていた。

夏の前に行つた時には部屋を間違えたのかと思つた。スミオはベッドの上で、化粧した顔で本を読んでいた。思わなくてきめ細かくて」

「ありがとう、本当に元気が出そうで。気持ち良かったし、女の子はいいなって思つてました」

スミオが少し低い少年の声で言つたら、やつと信じてくれた。それから時々来てこんなはずら。スミオも中山さんとは気が合うようで、話を聞かせてもらつたり、彼女はスミオのことを心からいつくしんでくれていることがわかつて、たまにならいいかなつて。スミオも、

「うん、午後からね。もう治療もないから時々この顔で可愛いネグリジェ着て廊下を歩いたりするの。少しどきどきして楽しい」

あたしも改めてスミオを見て思つていた。本当だ、あたしの百倍きれいだ。

それから、少しして、

「僕、かつこさんのことがずっと好きだったんですよ」いきなり言われて、あたしは胸を衝かれた。

「急に何を言うの」

「かつこさんは太陽みたいで、格好良くてあこがれていたんです」

指で自分の手の平に、勝という字を書きながら、

「強くて、名前のかつこって、勝子と書くんだと思つてました」

あたしは照れて、

ず近寄つて、

「スミオ、どうしたの」

と聞くと、スミオは本で顔を隠して、

「あー、かつこさん。見ないでえ」

そこへ入ってきたお母さんが話してくれた。少し離れた病室にやはり難病で入院している女の子の母親で、中山さんという気のいいおばさんがいる。通りかかつてよくスミオを見て挨拶してくれていたのだけど、スミオを女の子と信じこんでしまつて、スミオが一人の時にやつて来て、

「女はね、お化粧すると元気になるのよ。私に任せといて」

有無を言わさずに……多分ね。ここでお母さん一寸笑つて、バックしたり、乳液やファンデーションに口紅頬紅からアイシャドーまで。私に来て、見てびっくりすると、彼女胸を張つて、

「ほら見て、こんなきれいな子、お化粧のしがいいもあるわ。睫毛なんか太くて長くて、マスカラもいらなくらい。ねえ、きれいでしょ」

と自慢げに。お母さんが、

「本当ですね。ありがとうございます。でもこの子は男の子なんですよ」

と言つたら、中山さん腰をぬかして、おそるおそるスミオに近寄つて、

「……でも、やつぱり信じられない。こんな美人で肌も白

「何、それ」
 「一度、かつこさんが喧嘩したとこ、たまたま見たことがあったんです。男の子相手に、すごい速さで躍りかかって、ぼかすか。あつという間にやつつけてた」

「いやだ、そんな……」
 「僕、かつこさんと結婚したかった。夢の話だから笑って聞いて。かつこさんはすごい優秀な社員なんだ。立派な仕事をしてく部下に男の人も女の人も何人もいる。背広着て、下はスカート、の背広。それ着て出かけるのを、僕が行ってらっしゃいって見送るの。僕はうちで洗濯したり、掃除したり、花を飾ったりする。そして夕食の料理を作ってたかつこさんの帰りを待つ。でもかつこさんはもうれつ社員だからなかなか帰って来ないんだ。本を読んだり刺繍してても飽きてきて、料理のグラタンにお塩たくさん入れちゃおうなんて思ってる。もちろん本当は入れないの。やつとかつこさんが帰ってきて、玄関でただいまって元気な声が僕が走って迎えに出ると、両手を広げて僕を抱きしめてくれる。それから一寸離して今度はキスしてくれる。僕は嬉しくて、一人で淋しかったこと退屈したことなんか、皆忘れてしまうんだ……」

あたしは声が出なかった。本当にスミオを抱きしめたかった。力一杯。そう思ってたあわてて逃げるように帰ってしまった。あたしもスミオが好きなんだ。その何倍も。こ

れは愛とか恋とかそんなじゃない。スミオはあたしの命そのものなんだ。あたしの生きていく意味そのものなんだ……。

病院の担当の先生にスミオの病氣のことを聞いてみた。その小平先生、あたしの思いつめた真剣な顔を見て、少し間をおいてから話してくれた。

「スミオ君の病氣は、体全体が徐々に弱って、やがて生命の維持ができなくなる難病で、遺伝子の何らかの異常が原因と考えられているが、極めて珍しい、俗に百万人に一人という奇病で、今はまだ発病のメカニズムも治療法もわかっていない。一応僕はこの病氣の専門家ではあるんだけど、有効な処置ができなくて誠に申し訳ない気持ちだ。特にスミオ君は、自分の運命も我々医者への至らなさも、何ひとつ恨まず、怒ったこともない。時には沈んだ僕の顔を見て、励ますように笑ったりさえてくれる。あんなに心も容姿も美しい子だから、本当に何とかしてあげたいんだが……。今は彼のできるだけ快適な生活を見守っていることしかできない状態で……」

あたしが、スミオはこれからどうなるんですか、と聞くと、先生は、

「だんだん衰えて、程なく体も動かせなくなるし、言葉も話せず、寝て点滴を受ける状態になるだろう。但し進行の遅い病氣だから、急にどうかなるといふことはないと思

いるが、今のところ回復の、つまり治る見込みはないんだ」

あたしは拳を握りしめた。そして思わず言ってしまった。「その病氣、あたしが治す。あたしがスミオを助ける。どうして勉強したらいいのか、教えてください」

先生は一瞬体を反らせたが、もう一度あたしの目をしっかりと見て、

「その病氣について日本一の先生は、僕の先輩でZ医大教授の斉藤という人だ」

「ではZ医大に入ります」

仕事とか大学とか、先のことはそれまで何も考えていなかった。でもここで火がついた。医者になってスミオを助けるんだ。これがあたしの目標、生き甲斐になった。

4

三年生になって医学のコースを選択した。母さんはびっくりしていたが、父さんも、

「いいよ。そんなお前を見るのは初めてだ。すっかりやつてみなさい」

と言ってくれた。あたしは医学系コースに入って医者になろうとすることが、どんなに大学に入るのに難しく、たとえ大学に入れたとしても、それからどんなにたくさんのお金がかかるかということさえ、ほとんど知らなかった。

Z医大は私立の医科大学としては授業料やその他の諸費用が安い方だった。その代わりに難関ということでも有名なところだった。しかし、絶対に斉藤先生に学ぶんだと決意した。

その斉藤先生がスミオの容態を見に来る、と小平先生に教えられて、あたしは大胆にも会いにいった。斉藤先生、斉藤龍也(たつや)という人は、小柄で不思議なくらい静かな人だった。しかしその目の光は鋭く、あたしを貫いた。

「君がスミオ君の親友の鶴見(つるみ)さんだね。君のことはスミオ君から聞いているよ。……私達もスミオ君を助けたいんだ。君の気持ちがよくわかる。でも患者が少ないこともあって、まだわからないことばかりなんだ。私は全国で同じ病氣の人、二十二人を診ている。この小平先生とか専門の人はまだ五人もいない。君を待っているよ。君はたのもし、いい顔立ちをしている。きっと素晴らしい医者になれる」

受験は失敗した。まるで歯が立たなかった。でも母さんは、これからよ、しっかりね、と医進系の子備校に入る手続きをとってくれた。あたしはこれで炎の鬼となった。

その後まもなく、スミオは特別病棟に入るようになったと知らせがあった。その先は面会もままならぬというので、大学に合格してから会いに行きたかったけれど、とにかく

見舞いに行った。

スミオはもう顔に生氣も感じられない表情だったが、あたしの手を握ると、

「かつこさん、今まで、本当にありがとう。僕はもうだめです」

「何言ってるの。あたしが必ずあなたを治してあげる。それまで頑張つて、元気で生きて待つて！」

「僕ね、どんな風に死ぬのか、最期に何を見るのか、もうわかったんです。僕は幸せな気持ちで死んでいける。だから安心して、悲しまないで」

「だめよ、そんなこと言っちゃ」

あたしは絶叫した。

「それに僕がこの世に生まれてきた意味もわかったんだ。

だからもう心残りもない」

「だめ、あなたはあたしの命なのよ」

なりふりかまわずむせび泣いて、スミオの手を握りしめると、

「僕がかつこさんをお医者さんにするために生まれたんですよ。次の百人の僕を助けるために、かつこさんをお医者さんに、ね。お願い、次の百人の僕を助けて。それで僕のこととは忘れて、忘れてください……」

「何言うの。気がふれたって忘れないよ。あたしにあなたを忘れるらなんて、後生だからそんなひどいこと言わない

で」

あたしの声はもう悲鳴だった。しかしスミオは静かになおもくり返した。

「でも、お願い、忘れて。次の百人のこの病気の人のことを考えて……」

あたしはかぶりを振って飛び出した。そして、病室の外ベンチに両手をついて、滂沱の涙にくれた。体中の水分が全部涙になったと思うくらい涙が流れ出した。

やっと落ちついて病室を覗くと、もうスミオはすやすやと眠っていた。お母さんに促されて休憩室へ行った。

「ありがとうございます。あんなに力強い立派なスミオを見たのは久しぶり。あなたのおかげです」

そんな、とあたしが言いかけると、

「このところ、体もとても辛くて、見守るのも可哀相なくらいだったの。お母さん助けつて弱音も言つて。でも、あなたが来て、あなたを見た瞬間から、目の光が、輝きが違つた。これであの子も安らかに……」

「止めてください。あたしはまだあきらめたわけじゃありません。絶対に助けてあげる、そう決心したんです」

「そう、そうね。ごめんさい」

手で涙を拭つて、それからお母さんは先日スミオのことを話してくれた。

特別病棟に入ることになって、もう病院の中もふつうに

歩けなくなるというので、斉藤先生が来られて今日は中央病棟一階の処置室まで、君の好きな格好で行つてきてごらんと言つてくれた。スミオどうしたと思う。例の中山さんに念入りにお化粧してもらつて、私が娘時代に着ていた飾りも何もない赤一色のワンピースを着たの。顔も体も弱つて、お化粧してそんなすんとしたワンピースが一番衰えが目立たないからでもあったのだけど、そんな姿で私と看護師さんに支えられて一階まで。通りすがりの患者さんも、先生方に看護師さん、見舞いに来ていた人もみんな目を見張つて、それから振り返つて。帰りはもつとすごかつたの。外来の人も待合室から立ち上がつて見に来る人もいて、ぐるると人ばかりで。どこかのタレントか新人の女優さんだと思つたんじゃない。吹き抜けの二階から手を振る入院患者さんもいて、スミオの顔見知りの人もいたのかな、スミオもそれに応えて、笑顔で一寸手なんか振つて。体中が明るく輝いて。親の私が言うのも変だけど、別世界から来た人ようだった……。でもそのあと丸二日間は立ち上げられなかつた。

あたしの顔の奥にも、その光景が鮮やかに見えてきた。

灰色や白や黒の、くすんで沈んだ色ばかりの病院の中を行くスミオの姿。赤一色のシンプルなワンピースなんて、本当の美人しか着れないんだ。特にメイクしたスミオにはどんなに似合つて輝いて、華やかに人々の目に映えて心を

かきたて、あつくしたことだろう……。さつき涙にくれた目に、また少しうつつすらと涙がにじんでいた。

一浪してあたしはZ医大に合格した。予備校の先生に、「よくやつたね。おめでとう！」

と言つてくれて、

「君の偏差値では奇跡的だな」

とからかわれた。予備校の先生には、もつと易しい医大をすすめられたけど、あたしは斉藤先生に学ぶのだから、Z医大でなければならぬのだとはねつた。その予備校の先生、

「驚いた。そんな強い意志を持った受験生は君が初めてだ。素晴らしいと思うよ」

とそれ以後、Z医大の出題の傾向などを、親身になって独自に調べて指導してくれた。ありがたいと思つた。それに試験問題にも恵まれた。そんな詳しく教えられたところや、あたしがここと思つたところが随分と出題されていた。苦手の長文の英文解釈では、わからない単語が三つもあつて絶望しかけたが、スミオの顔を思いうかべて必死に折つたら、急にひらめいた。彼が助けてくれたんだ。

合格通知をもらつて、それを手にして病院へ走つた。しかしスミオは集中治療室に入つていて、話もできない状態だった。お母さんが涙を流しながら、

「鶴見さんありがとう。本当にありがとう。この子はずつと信じていましたよ。今でも時々私に反応してくれることがある。その時にあなたのことを知らせてあげます。喜ぶ顔が目に見えます」

ガラス越しに横たわるスミオを見た。目を閉じて、苦しそうでなかなか衰えて、生気もすっかり乏しくなったように見てとれた。辛くて、それで失礼した。もうスミオと会って話のできないこともわかった。一晚涙にくれてから、あたしは勉強に邁進しなくてはいけないんだ、と心をひきしめた。

半年して、秋の風が吹きはじめた頃、スミオが危篤と知らせを受けた。あたしが駆けつけた時は、もう亡くなったところだった。長く寝たきりになって、何日も昏睡状態がつづいたあとということだったが、眠っているそのままのような死に顔は、細く小さく見えたが、以前と変わりなく美しかった。見収めの顔を目に焼きつけようとしたが、すぐに見えなくなってしまった。シーツの端を掴んで、

「スミオー、スミオー、スミオー、ロー」

あたしはそう十回くらいくり返して、最後は声にならずに吃逆あげながら叫びつづけて泣き崩れた。間に合わなかった。わかっていて覚悟はしていたけれど、目の前に見て、ただひたすら悲しかった。悔しかった。神様に、何で！と取りついて、胸ぐら掴んで突き倒し、蹴っ飛ばしてやり

ていたが、何日もたった頃、少し離れたところからふと見ると、ばらと垣根の空間の白く残っているところが五か所はつきりとわかり、そこが「か・つ・こ・さ・ん」と読めることに気がついてまた息を呑んだ。お母さんに電話をかける、

「ええ、お気づきになりましたか。あの子がそんなしるしを入れたこと。ほら、鶴見さんには、もう自分のことを忘れてって言ったでしょ。あのあと、このブラウスに相手の名も自分のサインも入れてしまって、差し上げたらいけないかなと、スミオが言うものだから、いいのよ、あの人は。どんなことがあってもあなたを忘れる人じゃない。それを見てあなたを思い出して、自分の仕事に奮い立つ人よ。だから安心して。スミオは、うんそうだね、母さん、かつこさんよろしくって言って、その時に……そう言ってくれたの」

やっと我にかえった心地がした。スミオに託されたあたしの使命を思い出していた。

5

そうだ。それからあたしはこれを見て、幾度慰められ、何度奮い立ったことだろう。医学の勉強はとても難しかった。でも本当に辛く厳しかったのは、やはり現実にスミオ

たかった。

スミオの葬儀のあと、さそわれるままにお宅へお邪魔すると、お母さんがたたんだ衣服を出してくれた。広げて見ると、見事な刺繍が施された白いブラウスだった。

「スミオのかたみにね、どうぞこれを。死んだらこれをつこさんにかけてください。あの子の最後の作品なの」
あたしは息を呑んで見た。前身ごろ全面に、垣根に咲いた赤と黄色のばらの花。よく見ると花も葉や茎、垣根も一色ではなく、複雑な色糸が組み合わさって立体的に見える、気の遠くなるような繊細な色模様だった。数えてみると、赤いばらが十輪、黄色いばらが七輪、合わせて十七輪のばらの花が咲いていた。後ろにも刺繍があつて、こちらは狭い面積に紫のクレマチスが八輪咲いていた。

「スミオはね、本当はクレマチスの方が好きだったの」

よく見ると、クレマチスの右の下のつるが少し伸びて、それがローマ字でスミオと読める。彼のサインだった。

あたしは暫くの間、涙にくれていた。本当に立ち上がれない気持ちだった。力も入らず、何もかもが上の空だった家でも大学へ通つても、その途中の路上でもスミオの思い出ばかりが頭をよぎっていった。彼の存在の大きさと重さを今さらながらに痛感して、悲嘆に沈むばかりだった。

頂いたブラウスはあまりに見事で勿体なくて、着てみるなんて気にとうていなれなかった。ハンガーに掛けて眺め

がないことだった。何度も何度もスミオを思って、心の奥底からのしほり出るような寂莫と悲哀に襲われた。目標を失いかけて挫けそうだったこともあった。そんな時にスミオのブラウスが辛うじてあたしを支えつづけてくれた。十七輪のばらの花がスミオのやさしい表情と声になって励ましてくれた。大学の前半はそのように過ぎていった。研究課程に入って、やっとトンネルを抜けた心地だった。斉藤先生について夢中で、必死にくらいについて、何度も研究室で徹夜して、本当に寝食を忘れて頑張つて、ついに卒業にこぎつけた。

卒業を前にして母さんは、実はお金も足りなくて、撫川さんに援助してもらっていた。スミオさんの名義でのこされた二十万円の預金を、彼の生前の遺言で鶴見さんの学費にと。だからうちは借金せずにすんだ。まだ七百万円くらい残っている。あなたが一人前になったら、使った分を返してあげてね、と明かしてくれた。あたしは愕然とした。母さんはスカラシップの手続きをして、それを貰っている。大丈夫だと言っていた。本当はスカラシップだけではとても足りなかったんだ。スミオにそこまで、亡くなつたあとまで、現実的なところでこんなに助けてもらっていたんだ……。あたしは思わず膝をついた。頭を垂れて手を組んで、天のスミオとかつて蹴っ飛ばしてやりたかと思つた神様に祈つた。あたしの世間知らずが恥ずかし

くて情けなくて、そしてあまりにありがたくて勿体なくて。卒業直前に、斉藤先生とあと二人の学友と、アメリカのNC州立大学へ、学位論文の提出と解説のために行ってきた。斉藤先生の先輩で、この病気の世界的権威、ジェイムズ・ウォレンバーク先生に引き合わせてくれた。あたしは白衣の下に初めてスミオのブラウスを着て発表した。最後にスミオの姿をスクリーンに映して、スミオのことを話した。彼がこの病気に罹り、彼を助きたい一心でこの道に進んだのだと。彼と話しだすと、え、彼女じゃないのか、とざわめきが起こった。白衣を取って、今着ているブラウスは、彼があたしのために命の火を燃やして刺繍してくれたものだと言すと、もうひとつどよめきが起こった。しかし話しながら涙が頬を伝いはじめて、ブラウスを濡らしてはいけないと、あたしは必死にハンカチでそれを拭った。斉藤先生が走り寄ってきて、大きな自分のハンカチを渡して、体を支えてくれたが、あたしは声がつまって、もうそれ以上話せなかった。みんなは暖かい拍手をしてくれた。

「サンキュウ、ヴェリマツチ」

あたしはやつとそれだけ言うことができた。

卒業して、本式にNC州立大でスミオの患った奇病や、その周辺の関連する病気のことを、ウォレンバーク博士から学ぶことになって、斉藤先生はこう言って励まして送り出してくれた。

うより、内面からしつかり充実して輝いている感じで」

生まれてこのかた、ついぞきれいだなんて言われたことのなかったあたしは、それも斉藤先生から言われて嬉しかったけど、自分でもそれは感じていた。あんなブラウスをもらって、スミオが着るのならともかく、あたしに何で似合うはずもないのにと正直思っていた。前回の渡航の時に初めて袖を通して、おそるおそる鏡を見たあたしは、あれっおかしくない。いや、けっこういいじゃないと思ったのだった。でもわかっていた。あたしをこんなに褒めてくれたのはスミオなんだと。だからその時は、やはり彼を想って切なかつた。以前より透き通るような、ずっと平穏な心持ちでまた恋しく思うようになっていた。

あたしはセーターの下にそのブラウスを着て飛行機に乗った。スミオと一緒にアメリカへ行く。やる気に燃えていた。スミオはいつも、かつこさんは笑ってなくちゃと言ってくれた。そうだその通りだと思った。

飛行機が上昇して雲の間を抜けて、下に雲海がびっしり見えると、太陽の光が射してきた。アメリカの方から昇ってきた太陽だった。あたしはセーターを脱いで、ブラウスに日の光を当てた。

「スミオ見て。太陽だよ。あなたが好きだった。あなたと一緒にどこまでも行くよ。次のスミオ、そのひとりひとり

「ジェイムズには、サラというとても優秀な臨床医の奥さんがいる。サラからもしつかり学ぶんだ。それに、ケイト・マクローリンという、君の三歳年上の素晴らしい教え子がいる。ケイトを君の手近な目標として、またライヴァルとして彼女にも学んでおいで。それで数年したら帰って来るんだよ。今私は四十人の患者を診ている。少しづつ専門の先生も出てきているけれど、みんな手一杯の状況だ。多分君が帰る頃には、同時に診てあげなければいけない患者は百人を超えているだろう。この病気について知られるようになって、該当する患者はむしろ増えているんだ。解明へのアプローチは、君もよく知っているように、少しづつ進んではいるがまだまだなんだ。早く何とかしたい。しなければいけないんだ。私を援けてほしい。君は私の大切な、誰よりも期待する教え子だ。八年前に初めて会ったときからそう思っていた」

この頃はすっかりシルバークレーの髪となった先生はここで笑顔を見せて、

「……あ、今はもう立派な医者の方先生だけだね。これからも自信を持ってしつかりやって来なさい。君にはいつも、あの天国のスミオ君がっているんだ、大丈夫だよ。あの子は本当に神様がこの世の私達に遣わしてくれた天使だったんだと思っっている。……それにね、今の君は昔と比べてびっくりするくらいきれいになっている。垢抜けしたとい

と会うためにね」

もう泣くことはないと思っっていたのに、やはり目に少し涙がにじんでいた。でもすごく嬉しい涙。あたしは本当の幸せ者だ。スミオと出会うことができた。その上、うちの親や斉藤先生ばかりじゃない、たくさんの人に愛され励まされて、今こんな気持ちでいることができる。この幸せを、生きている限り、私のできることを、しなくてはならないことをやりつづけて、皆と分かち合うんだ……。そう思っていた。本当の炎の鬼となる。それはこれからなんだ、と。もう一度くり返した。

「スミオ、あなたと一緒にどこまでもね」

スミオの顔が浮かんだ。ほんの少し首をかしげて朗らかな笑顔。きつとスミオの夢の中の光景の、家でただいま帰って来るあたしを待ってくれている、あのスミオだと思っただ。可愛いエプロンをして、そのエプロンの胸のところには、クレマチスの花が一輪刺繍されている。その上に……その上にあの天上の美しさの、あたしの命の笑顔が。

〔彩雲〕10号より転載

文芸同人誌「彩雲」が、ここ静岡県浜松の地に呱呱文学で地球環境改善を祈る願いの声をあげたのは、奇しくも今から十二年前のことであった。爾来、「彩雲」は今日まで、数ある県内文芸同人誌の最前線に立って、県内のみならず中部圏の文芸誌をリードしてきている。それは等しく衆目の一致するところであろう。

「芸術と文学」を貴重な生命力と自負し、生涯の心の支えとする、齢八十を越しながら今なお精力的に文芸誌の発行に取り組みむ主宰者に率いられた同人諸氏は、いずれ劣らぬ文学に対する強固な熱情がほとばしる。

年に一度開催される合評会には、遠路はるばる金沢から、何と軽自動車で乗り合わせ来浜の面々を先頭に、一人の欠席とてない同人諸氏たちの口角泡を飛ばす議論は深夜にまで及び、いつ果てるとも知れない。かかる熱い文学論議は同人誌「彩雲」に掲載の作品群の、高レベルにつながっている。時間の経過を超越した延々と続く座談は、文学を志す者たちの集まりゆえ当然とはいえ、その熱気は参加者の文学への更なる傾倒を抜き差しならぬものにして、その

文学に対する強固な熱情

彩雲 静岡県



優 緑町
みどりまち ゆう
本名 富樫昌義 東京都世田谷区出身
大阪外語大学、病氣中退
現在、北陸の金沢にて創作活動
浜松の「彩雲」同人8年目
2017 第6回竹多文学賞（石川県の地方文学賞）優秀賞受賞
主な趣味は音楽鑑賞・演奏。評論。海外志向だが、日本的なものへの興味、愛着も持つ。愛読する作家、文筆家は中島敦、三島由紀夫、司馬遼太郎、梅原猛、森本哲郎、ドナルド・キーン。



「彩雲」11回合評会にて 文学論に熱を入れる同人たち

カレン民族解放軍のなかで
LIVES IN THE KAREN STRUGGLE
西山孝純

若き日本人義勇兵の手記 激戦の秘くケイ、ビルマ国境——ビルマの民主化をめざして、カレン民族解放軍とともに銃を持って戦う日本人の若者がいた!! 彼は何を考え、何をめざして戦いに身を投じたのか。ビルマの少数民族カレン族の苦闘とビルマ学生たちの民主化への苦闘——激動の渦のなかで戦い続ける日本人青年の密着の手記。

内田道雄
紙と油に消える熱帯林

燃える森に生きる

世界で最も生物多様性の豊かな森林が広がるスマトラ島、ところが、製紙用植林地と油ヤシ農園の大規模開発が進み、同島リアウ州は森林消失が世界一激しい土地になっている。植林地や農園の造成で失われた豊かな生態系と人びとの生命の糧は二度と元に戻ることはない。私たちの便利な生活の裏側で進行する現実を報告。

紙のための森、森を消す油 新泉社

彩雲の会

〒4331・21003

静岡県浜松市北区新都団二・二・二〇

彩雲の会

TEL 053・4288・2892

ていない。過ぎたことだが、顔真卿の書展には心を打たれて、訪問者一同声を失ったのみならず後ろ髪を引かれ、終了時間までそこを離れることが誰ひとりできなかったことを申し添えておきたい。

以上、「彩雲」誌の紹介とそこに属し、昼夜を分かたぬ峻烈な上にも、さらに研鑽・努力を己が身に課す、同人諸氏の文学に懸ける姿勢の一端をご案内申し上げて、紹介とさせていただきます。

また、文学だけでなく芸術の面でも同人の親睦を高めるために絵画コレクション等も美術館、喫茶店等の空間を活用して開催する活動を展開しております。



同 11 回会評会風景

後戻りをはや不可能なものとするに十分な魔力を持っている。作品に対するそれぞれの批評はいずれも一見識あり、有意義かつ貴重な意見交換が交わされるのが常である。御希望とあれば、同人以外でも参加は全く自由であり、広く認められている。希望のある方は、ぜひご参加を願いたい。目から鱗の落ちること、間違いのないところである。ぜひ、ご参加あれ。

力量ある同人のあまたある中で、既に世にある多くの文芸賞を受賞する者も続々と出てきている。名前を挙げればきりが無い程であるが、一例を挙げれば次のような者たちである。緑町優、阿部千絵、馬込太郎、樽林守、鈴木孝之、その他まだまだ続くがきりが無いので、この辺にしておこう。いずれ芥川賞の受賞者が出てくるのも間違い、と自信をもって申し上げておく。そのくらい文芸愛好家やその関係者、多くの読者たちに、目を見張らせる存在となっていくことを、改めて申し上げておきたい。

また勉強会と、ことさら大上段には構えぬが、常日頃から絵画、彫刻、書等の造形にも関心を深くし、足繁く県内のみならず首都圏の常設の美術館や展覧会を巡ること、年に幾度あるか、教えることすら不可能である。発行人の心に秘めた座右の銘、文章をものするためには感性が鈍ってはならぬ、の言葉を胸に、常に研鑽に継ぐ研鑽あるのみと、同人誰一人として、新聞紙上の催し物の広告も疎かにはし



「彩雲」11回会評会風景

キリギリス

中井ひろし

キヨは失明してからも海や空の色を忘れることはなかった。それはキヨが生まれた室蘭市地球岬のきらきら光る色彩だった。キヨの白い世界に広がる海の青い群青と天空の青い瑠璃色は父や母の姿を甦らせた。

両親は室蘭中央通り商店街の外れで小さな食堂を営んでいた。キヨが生まれたのは、海から吹く風がやわらかくなり、桜が一気に開花する大正十四年の春だった。長い間子室に恵まれなかった両親にとつて、娘の誕生は天にも昇るような心地だった。神様から授かった大事な娘だと両親は硝子細工を扱うように育てた。父親は少しでも泣いているとかわいそうだといひ、母を叱った。母は父の言葉に反発することもなく、抱いてあやさなかったことを悔いた。成

白い世界が広がった。片目が次第に視力を失い、ついに両眼が失明した。光の強弱や光の波長を感じる扉が閉まるのを、夜ごと声を殺して泣く母親と、それをたしなめる父親の低く沈んだ声で、はつきりと自覚した。

キヨは不自由を知らないで育った。両親は娘がほしがる物は、暮らしを切り詰めても買ひ与えた。見えなくなったキヨにはそれらは過去の残骸にしか過ぎなかった。見えないうことの焦りと苛立ちで、泣きわめきながら物を投げた。大切にしていたフランス人形の手足をずたずたに引きちぎった。身も心も凍るほどの不安と恐怖は消えることはなかった。払っても消えない霧の中を彷徨った。辺り構わず投げつけた茶碗が、母親の鏡台を直撃した。空を切り、割れた鏡の破片が四方に飛び散り、鋭利な破片はキヨの手を血で染めた。母親はなすすべもなく立ち尽くし、父親はキヨの指からしたたり落ちる血を唇で吸った。生暖かい父親の口内からキヨは指を抜いて、叫んだ。「イヤッ」父親を振り払おうとしたが、長身でがっしりとした身体がキヨを抱きしめた。切れた指に包帯を巻き、手当をしながら母親は「かわいそうな子や」と、泣きながら何度も言った。「かわいそうなんかじゃない」キヨの声は聞き取れぬほどか細かった。壊れ物を扱うように接する両親に、キヨは抵抗しつづけた。

「見えるようになりたい」とわめき、六畳の部屋中を歩き

長するにつれ、胸の高鳴りを抑えることはできなかったのである。笑えば歩くことを、歩けば話すことを、先々の成長を思うと、夢がふくらみ、今まで味わったことのない感情がこみ上げた。

生まれて六度目の桜が開花し、キヨは小学一年生になっていた。その頃から強い光を眩しく感ずることが多くなり、軽い頭痛や涙の症状が開始した。眼科医で軽度の炎症と診断された両親は安堵した。しかし、しばらくして大学院で受けた精密検査で、病名が判明したときは手遅れだった。両親は医者に絶望の宣告を下されてもなお、一縷の望みを持ち続けた。その言葉をひた隠し、良くなるといったが、霧が深さを増すように見えていたものが見えなくなり、

回り、額を壁にぶつけると、その壁を叩いて見えていた過去を取り戻そうとした。両親は我が子の将来を思案し続け、この先どうすればいいのかを聞き回った。札幌の盲学校への入学を勧められたが、溺愛してきた我が子を手離す勇気はなかった。通学していた学校には戻れないことを知ったキヨは、二階の階段から身を投げた。致命傷にはならなかったが、しばらく身動きできない身体となった。動けぬ身体になっても、見える世界を取り戻そうとした。喉をこすり、瞳を大きく開けても光を感じることはなかった。林檎の赤い色を思い出そうとすればするほど、キヨの脳裏から、形と色が遠ざかっていった。キヨは林檎をかじり、甘酸っぱさに泣いた。

いかに両親が思いを巡らせても、視覚をなくしたキヨにしかわからぬことだった。両親は、見えなくなっても、聞き、触り、匂いをかき、舌で味わうことができることを、何度となくいいきかせ、生きる望みをつなごうとした。起き上がることもできるようになったキヨは、部屋の空気を吸つかむように、隅々まで触手を伸ばした。冷たい湿気を吸った土壁や破れた障子の穴、すべすべした畳の匂いが、キヨの鼻をくすぐった。今まで聞き逃し、感じたことのない音や話し声が、キヨの心を揺り動かすはじめる。階下から聞こえてくる客の話し声、笑い声、怒鳴る声などさまざま。まな声階段を駆け上ってきた。聞きたくない話には耳

を強く押さえた。同情のことはがキヨは大嫌いだ。嘆き悲しみかわいそうという母親には、傷みを癒す力はないとキヨは本能で感じとった。消えゆく記憶の中でキヨは幼い頃の大切なことを必死で忘れまいとした。立ちこめた白い霧が晴れることはなかったが、大好きだったものや懐かしい風景はキヨの心にとどまった。港を出入りする船の形や色、海の上に浮かぶ駒ヶ岳の景色は鮮やかな記憶として、いつまでも忘れることはなかった。

母親には、見えないことを頭の中で理解できても、キヨ自身にはなれなかった。それでも母親は娘の眼になろうとした。

見える人が街中を歩けば店の看板や建物の様子、人のたずまいや服装、道を行き交う車の台数と色や形、空を見上げれば太陽のまぶしさや雲の流れを無意識に感じとることができると、視力を失えばそれら一つ一つが点だった。点をつなぎ合わせ、想像しなければ見えない。キヨは自分の状況を伝えることもできず、抵抗することで自分の居場所をさがしつづけた。

キヨを抱きしめて泣く母親を、「時間をかけて待つてやるのだ」と父親の武男は論じた。我が子を思う気持ちに変わりはなかったが、両親はどうしてやればいいのかわからなかったのである。キヨの閉ざした心は開くことはなかった。六畳の部屋がキヨの全てになった。このままでは病氣

になることを心配した母親は無理矢理部屋から連れ出そうとしたが、柱にしがみついて泣き叫ぶ娘をどうすることもできなかった。

「早く気づいてやることができれば、こんなことにはならなかったのに、ゆるして」と母親は後悔と詫言を繰り返した。父の武男は「おまえが悪いわけではない。おまえが強くないでどうする」とたしなめた。盲人の助言で無理強いはいけなと言われた両親は、キヨが心を開き、生きる希望を見つけてくれる日をひたすら待ちつづけた。

視覚を失ったキヨの聴覚は時が経つほどに鋭さを増していった。今まで聞こえなかった微かな音が、耳に伝わって来た。窓を開けることなく、さわさわと風に揺れる木々の葉のざわめきを聞くことができた。物に触ることで今まで感じなかった感覚が生まれた。さまざまな布の質感や木は堅さの中にもぬくもりがあり、スプーンの冷たい触感に触れることで、新たな想像の世界が生まれた。母親が顔を覆って泣く指の動きや父親の唇をなめながら話す言葉を、キヨは想像をふくらませ、感じとることができた。静止しているものにも息をつめて何かを訴えている音がある。新しい発見は、閉ざしたキヨの心を開いた。両親は娘が境遇を受け入れ、この先を生きてくれるようにと祈った。しかし、何不自由なく育てられ、学校で友達もでき、新鮮な日々に心躍らせていたキヨには、外界から遮断されたことが容易

に受け入れられなかった。

失明してからキヨの不満と我がままは母親のソノに向けられた。内心では後ろめたさを感じながらも母親を試し続けたのだ。おどおどしながら接する母親に対し、キヨ自身もびくびくと恐れていた。強く触れれば壊れてしまいそうな娘に対し、ソノは普通ならば間違っていることや、してはならないことが言えず、ただただ言葉を飲み込み、耐えつづけた。キヨはそんな母親に反発しつづけた。

それはキヨが年齢を重ねても変わることはなかった。やがてキヨに自我が芽生え、困らせば泣くばかりの母親には、自分の悶えや苦しみを解決する方法は持ち合わせていないのだと、錯覚した。「なんで生んだのか。死にたい」と叫ぶキヨに母親は怯えつづけた。ソノの神経は恐怖感と焦燥に苛まれ、しだいに娘を避けるようになった。父親は「そんなことでどうする」と妻を罵った。キヨは母が自分に抵抗していると憶測した。

「なぜ、面倒を見てくれないの」キヨは叫ぶことで母を求めた。助けを求めつづける言葉の凶器は、積もり積もって母親の心を壊した。純粹で繊細な母親の心を切り刻みながら、キヨは己の心に悪魔が棲みつき、ふり払ってもかま首を持ち上げてくるのをどうすることもできなかった。

母親は鬱病を患い、キヨが九歳の冬、物置で首を吊って死んだ。冷たい顔や体に触れ、悪夢を見ているとキヨは思

ったが、それは一生消せない現実だった。

自分のしてきたことがどんなに残酷でおぞましいことであつたかをキヨは思い知った。母親を死に追い込んだ後悔と、消えぬことのない苦痛がキヨの心臓をわしづかみにした。母親を死なせてしまったことで、キヨの心は深く暗い海の底に沈み、浮かぶことはなかった。

膝を抱え「かあちゃんにあいたい」と、キヨの窪んだ瞳から涙があふれた。

「もう父ちゃんも面倒は見切れん」父親の武男は娘を抱きしめ言い聞かせた。雪が降りしきる師走にキヨは父親に手を引かれ、札幌の盲学校へ入学した。

「おまえを母ちゃんのいない子にしてしまった。許してくれ。これからはなんかも忘れて、母ちゃんの分まで生きるんや」キヨは無言のまま頷いた。

父親はキヨを一人前にしようと長年厨房に立ち、働き続けた。盲学校の学費を捻出するためだった。父親の期待に応えようと、キヨは生まれ変わろうとした。

内に閉じ込めたキヨの孤独な心は、同じ境遇の仲間の中で、太陽に照らされた雪が溶けるようにしだいに和らいでいった。もう二度とだれも傷つけまいと、キヨは心に誓った。感覚訓練や歩行訓練を積み、点字を習得し、本を読み、広い世界を見ようとした。ある本に「よくみると、人間ほど可愛らしい生きものはいない」と書いてあった。想像で

きぬほどの不遇な人生を歩んで来た人たちが、温かい心を持ち、相手のことを自分のことのように考え、ありのままを受け入れ、「このまま生きるしかない」と、覚悟した人たちの強さを知った。同室の先輩が「生きるということとは、どんなことでも起こり得る賭けのようなもの」といった。その深い意味を、キヨはその時理解することはできなかったが、親が与えてくれた命を生かすためにも、もう我がままは許されない。与えられた命に感謝し、自分にむち打ち、生きながらえていくしかない、心に誓った。

授業中にキリギリスの鳴き声が聞こえてきた。ギーと高い声で鳴く虫の名前をキヨは知らなかった。友達は「耳をすませて聞くと、チョンと鳴くの、おかしいでしょう」と笑った。鳴き声はキヨの心の奥底まで染み込み、いつまでも忘れることはなかった。

キヨが十六歳の時第二次世界大戦がはじまった。これまでも障害者を守る法律はなく、キヨが部屋に閉じこもったように、多くの障害者たちにとっては世の中に出て自立することは並大抵のことではなかった。それでも施設や学校では舎監や教師がいて、先輩が後輩の面倒を見、仲間同士が助け合い、暮らしていた。しかし、戦争は障害者にとってさらに受難の歲月となった。戦時下になると生きている価値がないものとして、真っ先に切り捨てられたのが障害

者だった。男性の障害者は、徴兵検査で不合格になり、国のために戦えないものは「国家の米食い虫」と言われた。それでも国のためになんとしても戦いたいと考えた障害者もいた。視覚障害者は耳がいいので敵機の音を聞き分ける防空監視員になって役立ちたいと願ったのである。キヨは縫い針をもって国のお役に立ちたいと、指先を動かした。最初は不揃いの縫い目に「使い物にはならない」といわれたが、キヨは暗いところや夜でも裁縫をすることができるようになり、強みを持っていた。キヨは決して根をあげなかった。驚くほど上達し、眼が見えるのではと思われるまでになった。着物を引き裂き、布に触れることで覚えた手先だった。

軍人が寄宿舎に踏み込んで来た。「障害者は足手まといになる」と、青酸カリを渡された。生きる価値さえないのかと、キヨは激しい怒りで鳥肌が立った。さらに、戦争が色濃くなるとキヨら盲人は、あからさまにうとまれ、死を覚悟した。「もうあなたたちを守ってあげることができない」と教師は言った。盲学校が閉鎖され、父親の武男が迎えに来た。

家に戻ったキヨは寄宿舎生活をさせるために、父がどんなに頑張ってきたかを知った。客の注文を聞き、厨房で料理を作り、できた料理を客に出し、洗い物をして、店の掃除をする間はずかだった。忙しい昼時はお手伝いを頼んだが、少しでも切り詰めて金を捻出した。しだい

に料理の材料も手に入らなくなり、農家に買い出しまで行かなければ店はつづけられなかった。二階に上がり部屋の空気を吸うと、キヨは狂人に等しかった自分に対し、激しい嫌悪感を憶えた。広い世界を見せてくれた父親に感謝し、キヨは家の中のものをすべてを記憶しようとした。客がいなくなった時や掃除が終わった真夜中にキヨは店内を歩き、配置してあるものに触れ、厨房の棚には何枚の皿があり、包丁やまな板、砥石に至るまで手と頭で覚えた。記憶したバラバラの物を頭の中で整理し、ふたたび記憶させることにより、何歩進めばどこに何があるかが手に取るようになった。注文された料理を運ぶのに失敗は許されなかった。物資の少ない中で父が愛情込めて作った料理がいとおしかったからである。

終戦の年キヨは二十歳になり、六十歳を超えた父親の疲労を敏感に感じ、何よりも身を案じた。そう長く父親を働かすことはできないとキヨは考えた。早く独り立ちしなければとキヨは暇をみて街に出た。坂道の多さがキヨの足に記憶を残し、二度、三度歩く内に不安が消えた。しかし、人の気配を感じながらも、人混みでは誰かと接触した。「すみません」と言うのがキヨの口癖になった。電柱に頭や顔をぶつけることもあり、痛さよりも恥ずかしさが先にたった。街中にはさまざまな音がひしめき合っていた。人

の話す声が聞こえ、音楽が流れ、立ち止まる人、去って行く人の靴音が響いた。遠くから金属音が風に吹かれてくる。年が経つほどに街全体に活気が甦ってきたとキヨは思った。物資が豊富になり、賑わう人たちののはつらつとした声が街中にもあふれた。食堂も人が立て混んだ。キヨは父親の負担を軽くするために人を雇い、自らも調理場に立った。眼で確かめることのできないキヨは煮え立つ微妙な音を聞き分け、匂いで仕上がりを判断した。揚げ物だけはキヨの身を案じて父の武男は許さなかった。

キヨは日常生活で不自由さを感じなくなっていたが、結婚は一生できないと思っていた。盲学校時代好意を持った人はいたが、その想いは愛するという感情にまで至らぬまま、別れが来た。人を愛そうとする気持ちはあっても、人に愛されることは無縁だとかたくなに心を閉ざしていた。

キヨは盲目の自分を醜いと思い続けていた。「キヨちゃんは美人」と先生はいったが、信じてはいなかった。幼い頃の顔さえ記憶に留めていなかったからである。目が見えなくなった顔をなで回しても、鏡に映すことはできない。他人のことは声の張りや響きで想像することはできたが、あたって見ることはできないのだ。成人したキヨに言い寄ってくる男もいたが、心を許すことはなかった。父親の食堂を手伝うようになり、客の中で唯一人、キヨが心を動かした男がいた。男はいつも決まった時間に夕

食を食べに来た。話す言葉の中に深い闇を抱えていることをキヨは敏感に感じとった。ごちそうさまという言葉に誠実な響きが込められていた。

男が店に来ない日は病気にでもなつてはいないかとキヨの心は沈んだ。かつて味わったことのない胸の痛みと、苦しみさえも感じるようになった。二年もの間キヨは想う心を内にしまひ込んだ。男がキヨの心を開かせるまで二年の歳月を必要としたのは、キヨ自身が自分の心を試しつづけ、真実を見ようとしたからである。

話さなかつた過去を男はキヨに打ち明けた。戦争で生き残りはしたが、故郷の広島に帰還すると、原爆で家族は誰一人として生きてはいないという不幸に遭遇していた。悲嘆に暮れ北海道へのキップを手にした。行き着く先はどこでも良いと思っていたが、鉄工業で勢いのあつた室蘭に足を止めた。どういう感情を持っていたかはわからなかつたが、昭和二十五年暮れも押し迫つた頃、男はキヨに求婚した。男は黒川実と名乗つた。

男の経験した悲惨な世界を知り、キヨは結婚を承諾した。実はキヨの家に移り住み、家族三人の生活は笑い声が絶えなかつた。キヨは満たされた暮らしを噛みしめては、喜びに震えた。二階が夫婦の部屋となつた。寝床に入り、キヨは実に手を握りしめられ、息づかいを聞き、陶醉した。口を吸われ、遅い手で乳房をまさぐられてキヨは押し殺し

ていた声を荒げ、実の背を抱きしめた。筋肉質の胸板がキヨの胸と重なつた。ざらついた男の肌を受け止めてキヨは身をよじつた。

「雪のように白い肌」という声をキヨは耳元で聞き、股間を固くした。それを割つて、すべるように男の熱いものが、キヨの深い部分に侵入してきた。生きている喜びを身体で感じ、キヨは心が熱くなり涙を流した。顔が見たいと、指で顔をまさぐるキヨを実は押しつけた。

「あなたの顔が見たかつたの」聞き取れぬほどの小声だつた。無言で実はキヨを強く抱きしめた。

キヨは身ごもり男の子を出産した。

実と父親の武男は、毎日神様に拍手を打ち、深く頭を下げた。家族は子どもの賢太を中心に、日々希望をふくらませた。キヨは夫や父親の眼を借りながら、賢太を育てた。物事の判断がつくようになって、眼が見えない自分をどう受け止めてくれるかとの不安はあつたが、考えてもどうにもならないことは、よそと心に決めた。

成長すると賢太はキヨの眼になつた。おとずれた幸せを噛みしめながらも、キヨは賢太を甘やかすことはなかつた。五歳になつて賢太は汽車に乗りたと言つた。実が心配なので一緒に行くと言つたが、キヨは息子がどれだけのことができるのか、試したかつた。

「賢太に連れて行つてもらうから大丈夫」といつた。初めての短い旅だつたが、蒸気機関車の力強い音や汽笛を鳴らして坂を登る響きに賢太もキヨも興奮した。鷺別までのキップを買っていたが、賢太は「お母さん、もっと乗りたい」と初めてキヨにせがんだ。登別まで行くことにした。賢太は変わる景色のようすや色を母に話した。キヨは忘れていた色を取り戻そうとした。

「うみ、うみが見えてきた」
「海の色は覚えてるよ。群青色や瑠璃色、青い色でも何種類もあるのよ」

「そうなんだね。じゃ、今見える色はなに色かな」
「きつと、なつかしい色よ」

「そんな色があるの」ウソといいながらキヨは笑つた。汽笛の音がキヨの耳にいつまでも残り、賢太が引いてくれた手のぬくもりをいつまでも忘れることはなかつた。

死は予期せぬ形でキヨの愛する人を奪つた。父親を起しに行くついでに息絶えていた。昨夜、息子の賢太とテールを囲み楽しく食事をしたのに、父の武男は逝つた。キヨは父親に負わせた深い傷を思い、生前ほんの僅かしか埋め合わせることができなかつたことを詫びた。

「おまえが立ち直り、孫の顔も見れてしあわせだ」と、父は幾度もいつた。それがキヨには救いだつた。

父親が突然この世を去り、一年も経たぬ間にキヨ夫婦を通り魔のような不幸が襲つた。息子の賢太が車にはねられ即死したのだ。一人息子の賢太が小学校へ入学する前日だつた。ランドセルを背負い、沿道を飛びはね、嬉しさのあまり車道に飛び出した。カーブを廻つたトラックに跳ねられ頭蓋骨骨折で即死したのである。キヨは泣くこともできずに自分を責めた。むりやり空気を入れたタイヤが破裂したときのようなショックでキヨは錯乱した。母親を狂気に追い詰めた罰が下りたのだとキヨは思った。喉をかき針で吊られたような痛みと苦しみに襲われ、言葉も失つた。夫の罵声もキヨは遠くで炸裂する雷鳴を聞くようにおぼろげだつた。

「なんでしつかりつかんでおらんかつたかのう」

実は何度も呻くように言つた。キヨはつくづく自分が業の深い女だと思つた。失明し、いくら泣きわめいても決して元には戻らないことをあの時悟つたはずなのに、それでも息子の死を受け入れることはできなかった。無念さだけがキヨを支配しつづけ、何をしても虚しく、魂を奪われたように虚空をみつづけた。夫の実はキヨが盲目であることと理解し、結婚したはずなのに、我が子を失い、目明きの言動を強要するようになったのである。

キヨは沈黙を押し通し、言葉が戻らず、崩壊しそんな心をかろうじて保とうとした。戦争で身内を全て失つた夫の

生きがいは息子であったにちがいないと、キヨは感じた。夫と同じように賢太はキヨにとつても命よりも大切であることに変わりはない。しかし、いかに悔やみ悲しんでも賢太が生きて戻ってくるのではない現実をキヨは受け入れようとした。

「悪いのはわたし。許せないのもわかっているわ。わたしを責めて楽になるのなら」

「責めてなんかいない」と言う偽りの言葉をキヨは読み取っていた。しだいに言葉が二人の諍いを深めた。

「なんでわたしと結婚したのよ」実は何も答えなかった。

キヨは戦争で大切な家族を失った夫なら、自分の気持ちもわかってもらえるのではないかと思つたからである。二人の溝は日が経つほどに深くなった。実は苦しみを紛らわすために酒に溺れた。キヨは、愛することがこんなにも辛いものかと、涙も涸れた。楽しかった過去を思い出そうにも白い霧に阻まれ、たがいに心が壊れていくことをキヨは予見した。

「逃げないでわたしのことも考えて」

「疲れた。もう終わりにしよう」予期していた言葉だった。キヨはもうこれ以上夫を傷つけたくはなかった。結婚を決意するまでの二年間や、家族で暮らした年月をキヨは後悔してはなかった。それはキヨにとつていちばん煌めいた時だったからである。生きるると誓つた日からキヨに新たな人

生が開けたように、夫にも未来はあるはずだ。夫の抱えた闇を消そうとし、ふたたび暗い谷底に突き落としてしまつたと、キヨは思うのだ。見ることも、話すことも、聞くことも大切なことなのに、限りを尽くしても響かなければ無に等しいと、キヨは痛感した。かつて母にしたようにわめき、叫び、罵り、憎んでも、夫をつなぎとめたかった。しかし、母を死に追い込んだキヨにはそれが、たまたまなく恐ろしかったのだ。

息子の死から六ヶ月後、実はキヨの元を去つた。引き留めることができなかった。寂しさと悲しみでいっぱいになり、街中を彷徨つた。あふれる騒音の中に身を置いた。息子と同じように車にひかれればよいと、死を覚悟した。

「どこを歩いているんだ」幾度となく罵声をあげせられた。十一月の雨と風がキヨの全身を打ち付けた。キヨは露地裏に倒れ込み一夜を明かした。明け方命を救われ、死ぬことはできなかつた。キヨは生きながらえてみよう、ふたたび決意した。

生きるにはただ、耐えるよりほかに道はないとキヨは観念した。眼の中に母親が現れた。すべてを失つたキヨに何かを話そうと口を動かしていたが、聞き取ることはできなかった。自分を残して死んだ意気地のない母をキヨは憎みつづけた。今ごろになって母の気持ちがかかるなんて、キ

ヨは震えた。なんら母親と違わない自分を許せなかつた。母に許しを請おうにも遅すぎたと、キヨは茫然とした。耐え抜いた母を守れなかつた後悔と、生きようする心が重なつた。

この町を去ろうと、母の葬儀以来会つたことのない伯母を思い出した。

母の死んだわけを知つた伯母は、キヨのことを案じながらもその後、訪ねてくることはなかった。キヨは息子を交通事故で亡くし、身内は伯母一人になった。寂しさに耐えきれず、知人に代筆してもらい伯母に手紙を送つた。

手紙のやりとりが続き、キヨを案じた伯母が訪ねて来た。伯母の声は母とそっくりだった。懐かしい母に会えたような気がし、伯母の手を握りしめてキヨは涙を流した。「頑張つたね」と伯母はキヨを抱きしめた。「許して」キヨは何度も言つた。そんな言葉を押しつけ「キヨが悪いわけじゃない。ソノが弱かつたんだ」伯母の言葉がキヨの肩を震わせた。伯母の手はゴツゴツと節くれ、農業で生きて来た年輪が、太い血管に滲んでいた。キヨは伯母の体をもみほぐした。

腕の確かさを知り、伯母は美瑛「美瑛の地に来て按摩をやつたら」と言つたが、キヨが按摩で生計を立てて行くには、あんま、マッサージ、指圧師の免許がなかつた。キヨ

は盲学校であんまやマッサージの勉強をしていたが、昭和二十二年に制定された法律で、国家試験に合格しなければ、あんま、マッサージ師にはなれなかつた。札幌盲学校職業教育課程に進学し、三年間学習、試験を受ける気力はキヨに残されていなかった。伯母は「こんない腕を持つているのに、理不尽だ」

「今はなにもしたくない」とキヨは力なくいった。

「ゆっくり休んで、それからいいんだ」伯母はそれからいろいろ聞き歩き、整体ならば民間の資格で開業が出来ることを知つた。

「わしは年寄りだが、キヨはまだ若い。美瑛に來い。それから考えるべ」キヨは伯母の言葉に頷いた。母とは違い伯母は男まさりの気性だった。室蘭の家を売る交渉や美瑛で一家を買う手はずも伯母は難なくこなした。盲学校の先生に紹介してもらいキヨは札幌の整体師の元で半年間勉強を積んだ。伯母は農作業の合間を縫って、旭川から汽車に乗りキヨを何度も訪ねてきた。

「無理しちゃだめだぞ。頑張るんでない」が伯母の決まり文句だった。そんな伯母に迎えに来てもらい、キヨは初めて美瑛に降り立った。

整体の看板を出すことなく、叔母は客を紹介し、断るほどに繁盛した。キヨは伯母の心づかいに感謝して客を手厚く治療した。キヨはバスに乗り何度も伯母の家を訪ねた。

大地を渡る風の心地よさと、清んだ空気がキヨを生きかえらせた。

「手前に見えるのが十勝岳で、左手の奥が大雪山だ。そんな名前の山はないけどな。キヨにも見せてやりたい」といい、白い雪で覆われる冬や、裾野から雪が消え、茶色い肌を見せる春、青く染まる夏、赤く燃える秋の山のように、伯母はよどみなくしゃべってキヨに聞かせた。キヨは覚えていた色を思いだし、景色を想像した。伯母と話しているとき、自分のこれからの人生に、何らかの幸運が訪れるような確信をキヨに抱かせた。子どものいない伯母は傷心のキヨを実の子のように愛した。伯母は何かにつけてキヨの家を訪ね、困っていることはないか、して欲しいことはないかと、面倒を見た。そのたびにキヨは肩を揉み、会話を交わしたが、伯母から過去のことに触れることはなかった。それがキヨには嬉しかった。安堵と喜びがキヨの心を未来に向かわせた。「わたし学校に入り、試験を受けた」とキヨはいった。伯母は「やれキヨ。おまえならなんだってできるべ。思いついた時が吉日だ」キヨは札幌盲学校職業教育課程に入学した。四十歳を超えたキヨは、若い人たちの数倍努力したが、人の役に立つとの明確な目的は喜びとなった。

伯母と先生の励ましでキヨは試験に合格した。伯母は赤飯を炊いて喜び、握ったキヨの手に涙を流した。

った。それでも日に三、四人の客をとった。三十八歳の時から三十年間、身体を揉み続け、人と話すことで、人間の心を読み取る力を得ていたが、キヨはそのことに気づいてはいなかった。体調がすぐれぬ時も、いつもと変わらず客の身体を揉んだ。一人暮らしのキヨにとって、客との会話は何よりの慰めだった。客は農家の人が多く、農作業で疲れた身体を癒やしに来るたびに、作った野菜や米などを持ってきた。時々の差し入れにキヨは、その香りや手触りで季節を身近に感じる事ができた。昼時の客には台所に立ち、野菜を炒め、煮付けた魚を出した。目の見えないキヨが料理するのに最初は驚き、不安そうな声を発した。食堂の娘であることや失明してからも料理を作っていたことを話すと、客は納得し、手伝うのをやめた。常連の客がなんの違和感ももたずに接してくれることが、キヨにはこの上なく嬉しかった。人の出入りは、キヨの老いを防いでいるようだった。

戸をびったりと閉めきった部屋の中は冷たい空気が漂っている。人の声は全く聞こえてこなかった。キヨが耳にするのは雨音だけだった。屋根のトタンに降る雨の音は強く、時には弱い点となった。それらの音をつないで想像を膨らませて雨足を知ることができた。秋をつける雨は数日間続いた。長雨の切れ間をぬうように、キヨが感じられるほど

伯母との二十七年間はキヨを風いだ海のように穏やかな気持ちにさせた。心を過去にさかのぼらせることのない生活が、キヨの闇の心を洗い流し、明るくさせた。不幸な出来事といえば伯母が夫を亡くしたことぐらいだった。それさえもキヨにとっては自由になった伯母と暮らせる幸せをもたらした。つれそいを亡くした後も伯母は一人で農業をつづけようとしたが、キヨは見切りをつけさせた。口に出すことはなかったが、伯母と一緒に暮らすことでキヨは亡くなった母に恩返しをしたからである。伯母は子どもが持てたような喜びを、キヨは母の声を聞いているような幸せを感じていた。二人はひそやかに仲むつまじく歳月を重ねた。

その伯母も米寿を祝い、キヨの元を去った。

朝方のカラスの鳴き声で目覚めると眠れなくなった。伯母が亡くなり、もうキヨが頼れる身内はいないことを知った。無造作な家は長い年月で老朽化していたが、キヨには終の住処だった。キヨは数少ない家財を磨き、家中を掃除する。周りの住宅は次々に建て替えられ、キヨの家だけが取り残された。

キヨは失明してから、これという大病を患ったことはない。今まで一日中客の身体を揉んでも疲れを感じたことはなかったが、六十八歳を超えた途端に按摩が辛い仕事になるの強い陽射しが、背中に降りそそいだ。数羽の雀のさえずりをキヨは耳にした。

秋が深まり収穫作業で忙しい農家の人たちが姿を見せなくなると、家の中は静寂に包まれた。美瑛は夕冷えのする町だった。風が吹き、ストーブの火が欲しいほどの寒さとなった。風は木々の梢をざわつかせ、ガラス窓を叩いた。時計の音が六つ鳴ったのを聞き、キヨは夕餉の支度に取りかかる。まな板でジャガイモを切り、鍋に入れてフタをした。包丁を小刻みに動かし、人参を切ると甘い香りがした。調理場で父が刻む音を聞きながら、何を刻んでいるかを思い巡らせたことが、今でも懐かしい。煮え立つ音や立ち上る湯気で料理をあてた。「すごいぞ。よくわかったな」と父は誇らしげに言った。

一人前の食事を作るのにさほどの時間はかからなかった。テーブルに作った料理を並べ、合掌して箸を持った。味噌汁に口をつけたとき、奥の部屋でタンスを開ける音がした。目明きの人なら聞き逃したであろうかすかな音だった。裏口から何ものかが侵入したとキヨは咄嗟に思った。キヨは恐怖のあまり声をあげそうになったが、息を飲み込んだ。耳をそばだて、動く気配を感じた。一瞬逃げようとキヨは音を立てずに立ち上がろうとした。何をひるんでいるんだと、自分に言い聞かせた。立ち上がり電球の紐を引き、明かりを消した。奥で大きな音がした。キヨは襖を開け

た。緊迫した空気がキヨめがけて押し寄せた。空気を震わせ、何ものかの影がはじかれたように揺れるのを察知した。「だれ」キヨは声を荒立てずに話しかけた。闖入者は口ごもりながら言葉を発しようとしたが、声にはならなかった。闖入者が暗闇の中から襲いかかろうとする気配に、キヨはその場に静止した。

「金を出せ」大人の声を出そうとしていたが、子どもであることをキヨは直感した。相手が子どもであることに気を許したキヨは、落ちついた声で言った。

「お金ならあげるけど、こんなこと二度としてはだめよ」財布からお札を取り出し、少年が立っている方向に歩み出した。

「目が見えないって聞いていたのに、見えるの」少年の聲が息子の賢太にそっくりだった。懐かしさでキヨは少年に近づこうとした。少年は捕まえられないのではないかと、一瞬後ずさりした。恐ろしくなったのか、キヨの手から札を払いのけ、慌てて部屋から飛び出した。キヨは忘れられたことがない息子の声を聞き、後を追おうとしたが、慌てて一気に立ち上がることができなかった。しばらく見えない眼を遠くに注いでいると、賢太の音が聞こえた。頭を深く垂れると、指先に紙幣が触れた。畳に指を這わせ、散乱していた札を拾った。少年が何も取らずに逃げ去ったことを、キヨは知った。キヨの脳裏に母親に物を投げつけた記憶が甦

った。

布団に入ってから少年のことを思っただけ寝付かれなかった。どんな暮らしをし、どんな育て方をされたかを思うと、胸の奥が疼いた。うつらうつらとまどろみ、ギーと鳴く声で目が覚めた。虫の声は一度鳴いては、間をおいてまた聞こえた。鳴き声のありかを知りたくてキヨは起き上がり、音を立てないように居場所を探した。忍び寄ると鳴き声はぴたりと止んだ。身じろぎひとつせず息を殺した。しばらくしてチョンギースと鳴いた。声のありかは裏口の棚の上だとキヨは判断した。近寄るとキヨの籠が指先に触れた。少年が置いていったに違いないことをキヨは確信した。籠を居間のテーブルに置き、キヨはナスを一切れ、籠の中に入れた。キヨは飛び跳ね、キヨの指先に噛みついて来た。少年が置き忘れたキヨは、明け方まで鳴き続けた。

こうしてキヨとキヨの生活が始まった。客に飼育方法を聞き、キヨはギーと高い音程で鳴くキヨの音をおしく思うようになっていた。気温が上昇するとキヨは雌を求めて盛んに鳴き続けた。

一雨ごとに肌寒くなり、ストーブを焚く季節となった。羽根を振るわせ力強く鳴いていたキヨもめつたに鳴かなくなった。キヨは急に寂しくなり、キヨに話しかけた。それはキヨの一方的な話で、キヨが応えが見えなかったことが不幸ではなく、心を闇にした自分が、母を追いつめ、不幸を招いたのだ。失明してすぐに親離れをし、母が自分を突き放していたら、それぞれの生き方を変えることができたはず。死を望んでもなお、生かされてきた。先を思えば長かった人生も、ふり返ればあつという間だった。キヨは深く溜息をついた。

キヨが応えるかのように、ギーと高い声を発した。人間の言葉をキヨが理解できるか定かではないが、キヨは話しつづけた。一人の老婆の人生が、いかなるものであったかを知ってもらいたかったのである。

十一月も終わりになるとキヨの動き回る音を感じなくなった。キヨはキヨの籠を寝間に移し、長ネギと煮干しをちぎって与え、夜は毛布をかけた。風が壁と窓の隙間から容赦なく室内に侵入した。キヨは風邪をひいて寝込む日が続いた。客は少しでも揉んでくれと懇願したが、身体は萎えていた。自分の間休みの張り紙を客に書いても、らしい、玄関の内戸に貼ってもらおうと、寝床を離れることができなくなった。寝ている耳にも風は止むことなく聞こえた。キヨは寒さで時折目覚めた。ストーブの熱は確かに空気を揺すり広がっているが、身体に悪寒が走った。

キヨの籠の布団にさらに一枚の毛布を掛けた。まどろもうとすると、風がキヨを揺り動かした。数日が過ぎ

るはずはなかった。それでもキヨはキヨに話しかけ、過去をふり返った。自分の生涯がはたしてしあわせだったのか不幸だったのか、眼の奥底に広がる白い霧を見つめた。キヨが雌を求め鳴き声を上げた。キヨを閉じ込めていることが辛くなった。長生きさせるには長ネギの白いところが良いと聞き、適度に切つて籠に入れた。四角い籠の中で必死に鳴くキヨをキヨは可哀想だと思つた。しかし、今となっては外へ放り出せば、寒さに耐えられずに死んでしまうにちがいない。そんな残酷なことではできなかった。キヨはキヨが自分に似ているような気がした。それは物の形を正確に見ることができず、触手で感じ、物音を聞き取り行動することに起因していた。盲学校で図鑑を読み、わかつた。

夜もキヨは明かりを必要としなかったが、キヨに鳴いてもらおうと、電灯をつけっぱなしにした。部屋をストーブで暖め、明かりを灯すとキヨは鳴いた。秋の虫たちのように夜に涼しげな声で鳴くわけではないが、キヨはその声に生命力を感じていた。静かな部屋の中でキヨはキヨは絞り出すような声で一声鳴いた。その声がキヨに悲痛な記憶を呼び覚ました。

父の寂しさや、母の苦しみ、夫の悲しみは、キヨの罪と罰にちがいがなかったが、もう過去には戻れないと観念した。キヨはあらためて自分は不幸ではなかったと思つた。目

ても一向に快復しなかった。心配のあまりキヨは電話をかけ医者呼んだ。「疲労から来る風邪です」と言った。キヨは乾いた唇を噛みしめた。明日はキリギリスの籠の中をきれいにしようという考えが、頭にひらめいた。

薬が効いたのか翌朝、キヨは清々しい気分で見覚めた。風は遠くに去ったのか、静かだった。キヨは立ち上がろうとし、目眩を感じてその場に座りこんだ。数日前から不規則な打ち方をするようになった心臓に手を当て、キヨは不安にかられた。それでも枕元のキリギリスの籠の中に手を入れ、指を這わせた。少しもがくだけで噛みつく力は残されていないようだった。羽根の先端に触れ、傷みがわかった。さらにキヨを驚かせたのは、後ろ足の関節がないことだった。キリギリスはもがき、軽く握った手の中から必死に逃れようとした。そっと籠の中にキリギリスを置いた。もうジャンプして籠から逃げ出してくることもなかった。ちぎれた足は糞の中にあっただ。キリギリスの命はそう長くないことを感じた。キヨはしんと降り積もる雪の音を聞いた。

キヨは夜ごとキリギリスの籠を抱きながら、深い眠りに堕ちた。遠くから汽笛が聞こえた。キリギリスのかすかな動きをキヨは感じた。まだ死ぬことはできないと思った。旅立つ前に息子の賢太にそっくりな声を聞いたかったからである。キヨに降りそそいだ幾多の不幸をすべて帳消しに

する前の、ささやかな望みだった。キヨは少年が戻ってくるように感じていた。いや、必ず来ると思った。

参考文献

Asa Ito 伊藤亜紗 光文社
NHK Eテレ「シリーズ・戦後70年」 「障害者と戦争」

（「ざいん」 21号より転載）

この男に、私は落ちていく

月花の旅人
Nakagami Nori Gokko no tabibito
中上紀

私小説、5年ぶりの書き下ろし長編小説

文芸評論家 勝又 浩



なかい 中井ひろし

1947 北海道上川郡美瑛町生まれ
67 鯉淵学園卒業

70～鶴川町の劇団「むかっぺ」に所属し、「青年団」「鶴川高校」など脚本を10作品以上執筆上演／道文化団体協議会賞受賞
92 小説「旅の終わりは」で第1回苦民文学賞受賞
94 小説「鏡」で第3回苦民文学賞受賞
98 「地上」創刊50周年記念論文 佳作
17 小説「生きる」で室蘭文芸賞佳作
2013 「いずみ同人会」（苦小牧に入会）以来同人誌「響」に創作・論文など掲載
17 同人誌「ざいんの会」（室蘭市）に入会、現在に至る

ざいん
SEIN 21号

鳥ちゃんのこと

初老のオカマがある日、ぼくの部屋に飛び込んで来た！

女に愛を盗られた男と、女に亭主を盗られたオカマの、奇妙な生活がその夜からはじまった！
鳥ちゃんとぼくの、哀歓あふれるラブコメディ！

河野 つとむ

1600円 (税込/送料共)
ブイツーソリューション

文芸誌って何だ？

私は文芸誌を二つ発行している。その内の一つは詩誌で、その詩誌は今春に満五十年になった。いささか疲弊気味で終刊することにした。同人に劇団主宰のこしばきこうさんがいる。論客で文章の切れがいい。その彼は『全国同人雑誌』で特別賞と優秀賞を連続受賞した。

驚きはしなかった。特に『ざいん』二十号の「暗い森」の情景描写（特に雪原）に私は感嘆したのだ。北方住まいの私が惚れた表現力なのだ。コトバで絵画のような表しは常人には困難だろう。彼は難なく越えた。私は美術教師だったので、文章のデッサン力の卓抜さに脱帽したのだ。

その彼は終刊号に寄せた添文で「次は『個人詩誌』を死ぬまで出すとよいでしょうね。（応援しますよ）」とあった。そして添えられたエッセイに「詩と詩論とが分裂し詩論が詩を不安にさせてしまうのはなぜか。それは詩が人を選ぶのではなく、人が詩を選んでしまうからだ」と書かれていて、思案してしまった。これまで長く詩誌を出してきたが、「書けなくなつた。辞めたい」と何人もがつぶやき、退会していった。これには引き留める術はなかった。こし

皆さんの推論には、時折ドキリとする。

文芸誌に入る。私は創作誌『ざいん』の発行人でもある。同人は北海道南部に位置する室蘭と苫小牧に居住している。どちらも大きな港を持ち、フェリーが発着する。室蘭は製鉄、苫小牧は製紙と工場町でもある。これまで文学の往来は乏しかった。そこで三年前、私が呼びかけて『ざいん』と苫小牧の『響』で相互交流をはじめた。人物往来から初めて、文学研修と懇親を重ねてきた。この辺りは胆振地方になり、この市町村には文学同好会はあるが結社ごとになどなくなり、横の連帯は細い。とりわけ必要度はないからだ。同好の士は閉鎖しがちになる。

私は同好の由緒を大切にしながら、質的には風穴をあける方策を念じてきた。室蘭で五十年間、文化運動をしてきた。いまは『文芸協会』『港の文学館』が両軸になっている。文芸協会三役はみな『ざいん』仲間だ。その協会の主要取り組みは「文章教室」になって継続されている。顕彰としては協会主催の「室蘭文芸賞」が三十数年続いてきた。顕彰の趣旨は、作品を認め合うことなのだ。その文芸賞だが応募資格に工夫を凝らしている。ここ胆振在住か、胆振の文芸同人とある。後者の場合、どこに住んでも文芸誌が胆振発行なら宜しいと。過去に、米国住まいで地元文芸誌投稿で受賞した人がいた。

『ざいん』についてまとめる。年一度の刊行だが、みな切

磋している。誌是は（主義主張にとらわれず、清新で独創的な作品を生み出す努力をしたい。それを目的とする）となっている。平易だが、「清新で独創的」はハードルが高い。崇高目標ではない。努力目標でもない。やはり、実作目標にしているからだ。

本年も同人の中井ひろしさんが全国同人雑誌優秀賞を獲得した。本誌では連続受賞になる。発行人としてはうれしく誇らしい。まだ次の候補人はいる。親和と琢磨、この相容れない玉虫色に同人誌はある。でもそれは矛盾しない。同人は（同志人）なのだ。競い励む。矛盾するが、この不思議な相互こそ、同人誌の地熱なのだと思う。『ざいん』には、それがある。こしばきこうさんは「『ざいん』に近未来を書いています」と便りにあった。冒険・未知・虚無・孤独と、どこまで届くか。遣り残したくないものだ。自己証明だから、唸って考えたい。

（光城健悦）

『ざいん』の会

〒050・0071北海道室蘭市水元町22・7

発行人 光城健悦

TEL 090・2876・1409



「ざいん」同人 左から二人目が主宰者光城健悦

坂を上りながら

石田耕治

終点で市内電車を降りると、すぐ目の前にJR駅の駅舎があった。平屋建ての瓦屋根は昔のままである。改札口を出たすぐの広場にタクシーが一台停まっている。待合室に人の姿はなかった。

道路の端に立って、川村正吉はしばらく駅舎を眺めた。眺めている中に懐しさがゆっくり這い上ってきた。それまであたたかく動いていた時間がぱたりと停まったその前面に昔のままの風景が張りついているといった感じだった。目の前の道路を勢いよく走り過ぎた大型トラックの音で

現実に引き戻された。思考がゆっくり回転をはじめたのに合わせて、西のほうへ歩き出した。車の行き来が比較的多い道路の左側は線路の枕木でできた木の柵が続いている。木柵の中は、この駅が発発で終点の宮島口まで運転している宮島線の線路で、ちょうどいま、宮島方面から来た二輛連結の電車が速度を落として駅構内へ入っていくところであった。

片側の道路沿いの家並みは昔とほとんど変わっていないように見える。JRの駅前広場を出た最初が日本通運のマークが目立つ事務所で、硝子戸の奥に人影が動くのが見える。その隣が美容院だ。続いて歯科医院、雑貨店、文具店、そして駄菓子屋、洋食屋、呉服屋、履物店、茶屋といったふ

うに続いている。どの店にも見覚えがあるのは代が替わっても同じ場所で同じ商売を継いでいるということだろう。

その先に、生垣に囲まれた広い庭のある邸宅があったが、いまはビルになっていて、入口に保険会社の支店の表札が出ている。

この通りは江戸時代には山陽道と呼ばれた街道で、道の両側が松並木になっていたことが昔の絵図などに記されていて、その名残りと思われる古木を見ることができたが、いまは影も形もない。

戦後、この市の復興に伴って、大幅な区画整理が行われて、市内を西から東へ最短距離で通り抜けられる百メートル道路が完成したので、この古い街道は取り残されてさびれてしまい、いまのような閑散とした姿に変わってしまった。そのせいもあって、川村は、懐しさが漂う町の入口にきて、大きな変貌を前にした今浦島の気分を味あわずにすんだ。

ビルの角を曲がった狭い道の先が踏切りだった。踏切りの中は線路が何本も通っている。駅が近いせいだった。山陽本線の上り下りが中心で、あとは貨物の引込み線になっていて、かなり広い踏切りだった。

遮断機は上がっていた。踏切番小屋に人がいないのは、しばらく列車の通過がないからだろう。

この踏切を横切るように、線路の下を川が流れている。K町の奥の山間から発した流れが川となって流れ下ってこまできて、さらに流れて海へ注いでいる。

遮断機のある踏切と川を挟んで、無人の踏切がいまも存在していた。川村は思い出した。

小学三年か四年のときだった。まだ肌寒い季節だった。母と幼い妹と三人で無人踏切りを渡ろうとしていた。母が急かせるように妹の手を引つ張り、すぐ後に川村がついて線路にかかった時、広い踏切りの遮断機が下がり始めるのが見えた。同時に、彼方に線路を進んでくる上り列車が目に入った。踏切番の男がこちらへ向かって大声で叫ぶのが分った。列車が近づいてくる線路の音が次第に早く大きくなった。

「危い！」

川村が口走った。

母は気づいていないのか、妹の手を掴んだままである。

「それ以上行つては危い！」

川村は叫び、戻ってくるように手で合図をした。それに気づいた母が、妹の手を引つ張って川村の方へ引き返してきた。

その時、妹が履いていた下駄の片方が脱げて、線路の方へ転がった。

「下駄！」

妹が突然、母の手を振りほどいて、下駄の方へ引き返そうとした。

川村が夢中で妹に抱きついて引き戻した。

列車が警笛を鳴らして近づき、響音を立てて通過した。

一陣の風が周囲の埃を吹き上げた。転がっていた妹の下駄が風圧で飛ばされた。

三人は無事だった。

あときの光景が甦った瞬間、川村はその場に釘づけになった。激しい動揺がしばらく止まなかった。

無人踏切りにはもつと多くの思い出がたまっていた、ひとつひとつ引き出して感慨に耽っていると、いくら時間があっても足りなかった。思い出の縛から逃れるように、遮断機のある踏切をゆっくり渡った。

道は舗装されている。川村は、まだ舗装されていなかったこの道を通って、M町にある中学校へ通った。あの頃は広い道だと思っていたのが、いま見ると小型車がやとすれ違えるだけの道幅しかない。右側は道路に沿って家並みが続いているが、左側は浅い川で、僅かな流れが陽光にきらめいている。川を隔てて並んでいる家には各戸小さな橋が架かっている、こちらへ渡れるようになっていた。その一軒が小学校時代の同級生の家だったのを川村は思い出した。家々の背後にはすぐ山が迫っていて、山の頂に八幡神社が建っているはずだった。境内からは市内が遠望できた。

の仮住居へ引き移るまで、数え切れないくらい往復した道であった。

川村の目の前を、今、小学校四年生ぐらいの自分が、二つ年下の弟と一緒に並んで走り過ぎて行く姿が見えるような気がした。

細い道はやがて広い舗装された道路につながっていた。人通りが多く、車が行き来する広い道に出ると、川村は左へ向かって足を早めた。広い通りに出たせいもある、川村はそれまで詰めていた息を大きく吐いた。同時に自然に歩度を速め、せかせかした歩き方になった。

道の左側は昔からそうだったように畑だった。畑の向うは川を隔てて小学校のコンクリート塀が続いている。塀の中は運動場だった。運動場の向う側は森だった。森の樹木の連なりが運動場を浮き立たせて見えた。この風景も川村の目には焼き付いていて、臉を閉じるとすぐに浮かび上ってくる種のものだった。

畑の先には小屋が数軒立ち並んでいる。

前方に橋が見えてきた。先刻、石橋のところで分かれた川が小学校の塀に沿って流れている、その上流がこの橋と交わっているのだった。川は橋からさらに上流へ続いている。

川村は、橋を渡ったところで足を停めた。停めたというより思わず立ちすくんだという感じだった。彼の目が捉え

川沿いの道を進むにつれて、思い出がひしめき合うように押し寄せてきた。歩いている自分の靴音までがいくつもの記憶を掻き立てるように聞える。

その露地から甲高い声が聞こえる。川村は思い出す。露地の奥には長屋が四軒か五軒あって、その一軒に老母と男が住んでいた。男は若い時に勉強しすぎて気が違ったというので、いつも難しい哲学用語を口ずさみながら周辺を徘徊していた。他人に危害を加えるわけではなく、自分の殻に閉じこもっているふうであった。川村はその男を何度か見かけた。男はいつも他人の存在を無視していた。

つぎの露地の奥は園芸農家だった。広い庭にさまざまな樹木や草花が栽培されていた。その家の長男が小学五年生の時に川村の同級生だった。彼がいまどうしているのか、川村は古い時代の頃を思い出して、何故かふと空しい感じになった。彼との間に長い空白があったことが影響しているのかもしれない。川村の足はその露地へは向かわずに、川沿いの道を進んだ。道は次の石橋のところまで直角に右へ曲っている。川はそのまま真っ直ぐ上流へ続いて、小学校の横を流れて、さらに上流へ向かっている。

川村は右に直角に曲った道を一步一步踏みしめるように歩いた。小学二年生の時に引越してきてこの町に住むようになってから、中学四年の夏にこの市が原子爆弾で壊滅した時、川村の家も大きな被害を受け、市の郊外の草津町たのは、古い映画の画面を思わせた。その画面が眼前に次々に物語を展開していった。

或る家の門前に置かれた貯水槽に数人の男女が顔を突っ込んでいた。彼らはどれも同じように、着ていたものを剥ぎ取られ、裸同然である。貯水槽は防火用にとの家の前にも置かれていたので、すぐ隣の貯水槽にも同じように裸同然の男女が何人も取り囲んでいる。水を飲むためだった。

その前の道を街から避難してきた大勢の人々が、峠へ向かう坂道を、一様に両手を前にかざす格好で、ウオーウオーという声を発しながら、駆け足で走り過ぎて行く。人々の列は途切れることなく続いていく。

昭和二十年八月六日、午前八時十五分に、この広島市は米軍のB29爆撃機が投下した一発の原子爆弾によって壊滅した。後にピカドンとも表現されることになったこの爆弾は、核時代の幕開けを告げていた。

川村の眼前の幻影は消えて、元の風景に戻った。

彼の頭の中では、先ほどから始まった、ガラガラと鳴る音が止まない。ガラガラ、ガラガラ、とその音は続く。速度を速めたり緩めたり、高くなったり低くなったりしながら、頭の中を廻転している。その音が突然、頭から飛び出した。そのまま空高く飛び去っていくのがはつきり目に見

える。音はやがて光に変わり、空の彼方に吸い込まれて消えた。

川村の頭の中に静寂が広がった。その静寂を底から突き上げるように、声と呼んだ。

「待っていたよ。みんなで待っていたよ」

声ではない。反響だろうか。声が何かにぶつかって撥ね返ってきたときに聞こえるような不思議な振動音だった。待っていたよ。

音はそう聞こえた。次から次へと同じ言葉の繰り返しだった。

川村はそこに突っ立ったまま、息を止め、目を閉じていた。

すぐそこに小学校の正門があるはずだった。

二年生の時に田舎の小学校から転校してきた川村は、国語の授業で、先生に指名されて、教科書を朗読した際に、先生は川村の朗読をひどく褒めた。そのことで川村は転校生のコンプレックスを持たずに済んだ。川村はまた、音楽にも自信があった。その前の年、田舎の小学一年生の時に、学校から選ばれて、同じ一年生の女子と一緒にこの市のNHK放送局で唱歌を歌い、それが放送されたという実績があった。川村はそれをひそかに自慢に思い、自信にもなった。

今、聞こえているのは、あの頃と同じ組の生徒たちの声

に参列した。遺体を納めた棺のずっと上の壁に、その子の微笑を湛えた写真が飾ってあった。川村はその写真に向かって掌を合わせて、別れを告げた。

その子がいなくなったことは川村にとって大きなショックだった。川村の中で、その子の思い出と姿がいつまでも消えずに残った。

目の前にある小学校の正門が霞んで見える。

川村は再び思い出に耽った。

その子が亡くなって一年が過ぎた冬の初めに、日本はアメリカと戦争を始めたのだった。最初の頃の連戦連勝のニュースに、国民は喜びに沸き立った。

遙か彼方に消え去ったはずの思い出がはつきりと浮かび上ってくるのに、川村は思わず息を呑んだ。

六年生だった。毎月八日の朝、学校から旭山神社に参拝して、皇軍の戦勝を祈願したのだった。何時の参拝のときだったか、川村は神社の長い石段を上る途中で急に胸苦しくなり、胸が締めつけられ、体の奥から突き上げてきたものを吐いたことがあったのを鮮明に思い出した。どうしてあの時急にそのような症状に襲われたのか、その後は何事もなく学校へ戻ったのだった。不思議なことだった。

かもしれない。

男子ばかりの組で、担任も男の先生だった。川村は人見知りする癖があり、なかなか皆と馴染めなかった。それでも何人か友達ができた。その友達とは仲良く交際を続けた。

その中の一人の声が呼んだような気がした。

その子も川村と同じ転校生だった。その子の父親は会社の重役だった。その子の家は学校正門前の坂を上ってすぐの、峠に通じる道に面した大きな門の家だった。

川村はその子の家へ度々遊びに行った。

広い勉強部屋には一隅に大きな机と椅子があり、壁は本棚になっていた。本棚には童話や植物図鑑など多くの本が並んでいた。

川村は読みたい本を借りて帰り、毎日読んだ。読み終わった本を返して、新しい本を借りて帰った。

その子は体が弱く、よく学校を休んだ。五年生になった最初の日に、学校で倒れ、病院へ運ばれて行ってから、長い間学校へ出て来なかった。

夏休みが始まる日に、川村はその子のことが気がかりだったので、家を訪ねてみた。

きれいなお母さんが応対に出てきて、その子はまだ入院しているかと教えてくれた。

夏休みが終わり、秋のはじめに、その子は亡くなった。

川村は、担任の先生や同級生たちと一緒にその子の葬儀

遙か昔の出来事が不意に浮かんできたことに、川村は戸惑った。

川村は古い思い出を振り払うように頭をぐるぐる廻した。そして、いま自分が小学校の正門前のこの場所に立っている意味について思いを巡らした。

何故に自分はいま、ここにいるのか。何故に自分はここに来たのか。

ここに来たのに深い理由はなかった。ただ、自分が幼い頃にそこに住み、成長した町が長い不在の間にどんなふうに変わっていったかを、四十年近く経た今、自分の眼で確かめておきたかったのだ。もう七十歳近い年齢になった川村にとって、あと何年生きられるか分らない。そう考えると、今度久しぶりに広島を訪れた機会に、自然に足がこの場所へ向かったのだった。

川村は現在、横浜に住んでいる。広島を訪れたのは、毎年八月六日に市内天満川の川縁に置かれた旧市立中学校死没者慰霊碑の前で行われる死没者慰霊祭に参列するためであった。

川村は、原爆で当時市立中学校一年生だった弟を亡くした。弟たちはこの川縁の近くで建物疎開作業をしていて被災した。その弟の慰霊祭に以前長い間、母が参列していた。数年前に母が亡くなってからは、川村が横浜から出向いて参列している。

川村は、戦争が敗けて終わった時、中学四年生だった。戦後、さらに一年中学校に在籍した後、当時の高等師範学校英文科に入学したが、一学期を過ごしただけで退学し、翌年、改めて高等学校を受験して、文科甲類に合格、入学した。一年後に学制改革で新制大学が創設された。それに伴って、川村は広島大学政経学部を受験して入学した。大学では四年間経済学を勉強した。卒業して広島銀行に就職した。広島銀行に一年間勤めた後、辞職して東京へ出た。兼ねてから目指していた作家修業のためだった。作家を目指していたというよりも、自分の一生を大きく変えた、青天の霹靂ともいえる出来事であった原爆被爆をテーマにした作品を書き残して置きたいと密かに心に決めていたことを実現させるためであった。

東京へ出て、まず生活することを考える。

失業保険で手に入る僅かな金も六か月で打ち切られるのだから、早目に働く場所を確保しておかなければならない。母の弟が広島で勤めていた会社の上司だったM氏が東京におられると聞いたのを思い出し、叔父に頼んで紹介状を送って貰った。その紹介状を持ってM氏を尋ねた。M氏は東京北部にある米軍兵器廠と関係のある会社の工場長であった。M氏の紹介で、川村は米軍基地で電気計算機課の職員として働くことになった。朝鮮戦争の最中だった。

これで川村は東京での生活を確保することができてひと

安心となった。そこで、すぐに次の一手を考えた。

中学校時代の同級生で、当時は一家で東京に住んでいる友人の母方の人脈を通して或る有名な映画脚本家に紹介され、その人の門下として脚本の勉強を始めた。これには川村なりの考えがあった。当時はテレビ局が出来始めて、番組作成のために脚本家の需要が増えてくる時代であったから、この仕事につけるチャンスは大きかった。川村はそれを狙ったのだ。少しは廻り道になるが、結局は自分が目指している原爆小説の実現に確実につながるという予感があった。

脚本家の許での勉強の効果が現れてきた。

数年後には、新しく出来たテレビ局で仕事を始めた。テレビドラマの脚本や朝の報道番組の構成台本の作成など、様々な分野の新しい仕事で順調に滑り出した。

それと併行して、川村は、原爆をテーマにした小説をこつこつと書き続けていた。

やがて、小説の方でも運が開けてきた。

高等学校時代にドイツ語を教わったことのあるT教授の紹介で文芸評論家S氏に作品を見て貰うことになった。何回目かに見て貰った作品が或る文芸誌の新人賞を受賞した。原爆をテーマにしたものだった。続いて同じ文芸誌に掲載された作品が新聞の文芸欄で採り上げられたりして、作家として独立できる地位は確保できたが、川村は、いわゆる

小説家としての道を選ぶつもりはなかった。これまで通りの形で、表向きはテレビ脚本を書くことを本業として、小説は一途に原爆をテーマとした作品だけに徹しようと思っていたから、発表するのは年に一回か二回、原爆祈念祭前後という状態だった。川村はそれを当然のこととして受け止めていた。

川村は、それまで勤めていた米軍基地での仕事を辞めた。

映画脚本家との関係はその後も続き、師匠の脚本づくりの手伝いで京都へも度々出かけた。そのため、映画脚本の依頼も来るようになったが、川村にとってはテレビ脚本の方がずっと魅力があったので、いよいよ師匠の許を離れてからは、映画界との縁は切れた。

このようにして、川村は、三十年近くを過ごして来たのだった。

川村がそれまで文芸誌などに発表してきた作品の中から五篇を選んで一冊にまとめた小説集を刊行したことで、原爆をテーマにした作品を書くという目的は一段落したことになる。以来、同人誌に掲載するための作品を最後に筆を止めて、休業状態に入っている。

いま、川村には、是非これだけは書いておかなければならないという気持ちにさせるテーマのものは存在しない。

その意味では、今度の広島行きは気分が楽だった。だから

ら、時間に余裕ができたからぶらりと昔自分が住んでいたこの町に来てみようという気になったのだ。

明日、横浜へ帰る予定にしている。

川村は、正門を正面にした小学校の姿をじっくりと眺めた。

恐らく見納めになるだろう。

彼は目を閉じて、短い感慨に耽った。

静かに目を開けて、次の行動に移った。

ここからゆるい傾斜の道路を上方へ上って行くことにした。自分が小学二年生から中学四年生まで住んでいた家が今どうなっているか、よく見届けておきたかった。

道路の道幅は昔よりずっと広くなっている。舗装も行き届いている。

川村はその道路をゆっくりと上って行った。

周囲を眺めながら上って行く川村の目の前に、昔の風景がゆっくりと浮かび上ってきた。

ランドセルを背負った小学生の自分が小走りに上っているこの道は、それこそ数え切れないほど行き来した通学路だった。

少しずつその頃の風景が甦ってきた。それにつれて現在の風景が次第に遠去かり、消え去ったように思われた。

ランドセル姿の自分が小走りに上って行く姿がはつきり見えてきた。

カレが上って行く道の左手が急に開けてきた。そこは広々とした庭だった。庭の奥に見えてきたのは農家風の家屋である。

川村は思い出した。その家は小学校の一級上の男子の家だった。妹が一人いた。その子の父母は、家の裏に広がっている畑でいろいろ野菜を作っていて、それを出荷していた。

川村は、道路を上っている小学生の自分との距離が開いたのに気づいて、急いで追いかけた。

川村の目の前にはまだ昔の風景が広がっている。

道路の右手の家並みの先に広い田圃が見えてきた。かなり広い田圃である。

この田圃では、春先には水が張られて稲が植えられる。

夏にかけて稲は少しずつ育っていく。夏が過ぎてしばらくすると、いつのまにか水もすっかりなくなって、大きく育った稲が穂を垂れ始める。やがて実りの季節がやってくる。

小学生の川村は、日々、学校の行き帰りに田圃の稲を見ては自然の季節による移り変わりの姿を目で見て感じていたのだったろうか。

川村は現実に戻った。

田圃の姿は消えて、そこには見慣れない家並みが続いている。

いま、小学生姿の自分が川村に向かって大きく手を振り、その手で板塀の家を指さした。

「ここだよ。この家だよ。」

川村は大きく頷いて、急いで小学生姿の自分の後を追った。

小学生姿の自分は、板塀の家の小さな門を入った。奥まったところにある玄関の戸を開けて入った。玄関戸がぴりりと閉まった。

それきり、いつまで待っても、小学生姿の自分は現われない。

この家で、川村の家族は暮らしていた。川村と父と母と弟。妹はこの家で生まれた。

父は県庁の役人だった。その関係で、当時は珍しかった電話が設置された。玄関から廊下につながる角の柱にびったり据えつけられた電話器の横に短い筒型の受話器を引っかけるといふ旧式のものだった。

電話をかけるには、まず受話器を取って電話局を呼び出す。次に電話局の交控手を通して相手方につないで貰い、それから相手と話をするというやり方だった。

時々、近所の人ややって来て、珍しそうに眺めていることがあった。

川村は、この家から中学校に通ったのだった。

川村は立ち停まってひと息ついた。

川村は物足りなかった。

すっかり変貌を上げてしまった町の風景のどこかに昔を偲ばせる名残りだけでも残ってはいないだろうか、改めて目を凝らして見た。

それらしいものは見当たらない。

「そうだ、あったぞ。忘れていたものを思いだした。それは、あそこだった。」

田圃と道路を隔てた道路沿いに大きな二階家があった。

古い時代の商人宿を思わせる建物で、住んでいる人も多かったように思う。

川村の目の前に、その建物を中心に、周囲の風景が幻影のように浮かび上ってきた。

小学生だった自分の姿が浮遊している。ランドセルを背負っている。川村と距離をとって少し前方をゆっくりとした足取りで歩いていたのが、不意にこちらを振り向いた。

「あそこがぼくの家なんだ。はつきりした声だった。」

田圃が途切れたその先の短い家並みの何軒目かが魚屋だった。その魚屋を川村ははつきり覚えている。

魚屋の先は露地になっている。

露地を隔てた向いに板塀の家が見えた。

その家に川村の家族が住んでいたのだった。

川村は、呆然と道端に立ちつくしていた。

川村の目の前に現実にあるのは板塀の家ではなく、こじままりした洋風の建物だった。

魚屋もそこにはなかった。

道路は上り坂のままずっと上の方まで続いている。道路の行く先は峠になり、峠を越えたと山村だった。

道路に沿って続いている左手の家並みの裏手は低い山だった。山際は岡になっていて、茶色の地肌が剥き出しのままの崖になった、その下に地面がひろがっていた。

いま川村が立っている場所から少し上方へ行くと、その岡へ上る道が始まっているはずだった。

岡の上の平な地面を、かつて隣組の畑として共同で利用していたことを川村は思い出した。主として野菜作りだった。

休日になると、隣組の人たちがやってきては畑の手入れに余念がなかった。小学生だった川村も一緒に手伝ったものだった。

いま、その頃の面影はどこにも見当らなかつた。

露地の入り口に立って思い出に耽っていた川村は、われに返ると、思い直して、露地の奥まで行ってみることにした。

露地の佇まいは確かに昔のまま、その頃の雰囲気がいくらか残っているふうに感じられはするものの、周囲の余

りにも大きな変化がそれを打ち消して、川村の思い入りを拒んでいるように思われる。

川村は奥へ進んで行った。

露地の奥は細くてかなり急な坂道になって下っている。川村はその坂道を踏みしめるようにしてゆっくり下って行った。

道を下り切ったところは川だった。小学校の横を流れている川の上流に当たっていて、川幅は狭くなっているが、水量も豊かで流れも早かった。

川村は川に架かった短い石の橋を渡った。橋を渡っている川村の頭を不意に記憶が鋭く過ぎった。

昭和二十年八月六日の影像が幾つも折り重なって、思いもかけない早さで眼前で羽ばたき始めるのだった。

これまで何度も繰り返して思い出しでは感慨を新たにしてきた幾つもの幻影だった。

それがいままた甦ってきては、あたかも今初めて目にする新しい絵模様のように荒々しく展開を始めるのに、川村の目は釘づけになった。

その前日、八月五日。よく晴れた日だった。母は妹を連れて実家へ行ってた。食糧を確保するためだった。母の実家は中国山脈につながる田舎で、広島から列車で四時間近くかかる山村の農家だった。大きな農家で、自作の他に

小作人を何人か抱えていた。母は実家の長女で、祖母に可愛がられて育った。小学校を出ると、列車で小一時間かかる町の女学校へ入り、親戚の家に下宿して学校へ通ったという。更に距離の離れた村出身の父とどういふ縁で結婚したのか、川村は知らない。

八月五日。父は朝から出勤していた。

市立中学一年の弟は市内の建物疎開作業に狩り出されて、朝早く出かけていた。

それまで川村は学徒動員で市の南にある軍需工場で終日働くという日々を繰り返していた。学校へ行くことは無かった。全くの工場労働者だった。

勉強ができないことの焦立ちと日々の労働による疲労が重なって、心身共に疲れ果てて、ひどい不眠が続いていた。やがて、朝出かけるのがひどく苦痛になってきた。

それを見兼ねた父母が話し合って、父に連れられて県立病院へ行き、医師の診察を受けた。神経衰弱の症状が出ていたので休養が必要だと診断された。診断書を出して貰い、それを学校に提出した。翌日から工場を休むことになった。

八月三日から休み始めた川村は、四日はひとり、書齋でぼんやり過ごした。五日、父と弟も出かけて一人になると、急に外へ出てみたくなった。半ばやけ気味になっていた時なので、市内まで出て、映画を観ようという気になった。誰も止める者はいない。すぐに支度にかかった。

日が暮れかかるころ、母が妹を連れて、実家で手に入れた食糧品を持って帰ってきた。

父はその日が宿直に当たっていて、帰って来なかった。

その夜は、母が持ち帰った白米で炊いた御飯をみんなで腹一杯食べて、満足して寝ついた。

夜分、警戒警報のサイレンが鳴った。市民が定期便と呼んでいた米軍のB29爆撃機が一機、上空に飛来して飛び去った。

八月六日。朝早く、宿直明けの父が帰ってきた。父は早速白米の御飯を満腹するほど食べて嬉しそうだった。

家の中にしばらく、和やかな空気が漂っていた。

建物疎開作業に出かける弟が早々と支度を終えて慌ただしく出て行った。

まだ床の中にいた川村は、「行ってきます」という弟の声を聞いて、ようやく起き上がった。

母は妹を連れて近くの家へ出かけて行った。市中の建物疎開で出た古木材を隣組で荷車を出して取りに行ってみんなで分ける、その相談をするためだった。

父は、食事を済ませて、新聞に目を通したりして体を休めていたが、再び出勤する支度にかかり、茶の間に鏡を持ち込んで髭剃りを始めていた。

川村は工場を休み始めて三日目だった。

筆筒を探して父の着古した国民服を取り出して着た。以前からあった工具帽を被ってみた。これなら知人に会っても分らないという自信があった。

ズック靴を履き、戸締りもそこそこにして家をでた。坂道を下り、小学校の前を過ぎてから小走りになった。

市内電車の終点から電車に乗った。

繁華街近くの停留所で降りて、まっすぐ映画館へ向かった。

映画館の切符売場には列ができていた。

当時、中学生は映画館に入場することを禁じられていた。市中を巡回している憲兵に見つかれば万事窮すという結果になる。

川村は前の人の後に身を隠すようにできるだけ体を縮める格好で切符が売り出されるのを待った。何事も起こらなかった。無事に切符を買って入場できた。

その映画館で上映されていた映画は、清水次郎長が主人公の「次郎長水滸伝」というやくざ映画だった。それまで長い間映画を観たことなかった川村は、われを忘れて画面に吸いつけられ通しで十分堪能した。

面白く楽しい気持は映画館を出ても続いていた。急いで停留所へ向かい、電車に乗って帰った。充実した一日であった。

午後遅く、弟が疲れて帰ってきた。

「今日から少し勉強を始めよう」という気になり、書齋に入り、机に向かってぼんやり宙を見やっていた。

この先自分がどうなっていくのか、不安を通り越して苦痛にさえなっていた。将来のはっきりした目標を見失ってしまった今、このままの状態で過ごし、何が生まれ、何が生まれ、何か起ったのか。そんな思いが去来して、ますます気分が滅入っていきそうだった。

その時だった。

突然、周囲が茜色に染まったのだった。

川村は思わず立ち上って窓辺に駆け寄って、外を凝視した。周囲に焼き付いている茜色は消えない。

「何が起ったのか」

考える余裕などなかった。夢中で書齋を出て、廊下を玄関へ向かって駆けた。

一瞬、気を失った。

ふっと我に返ると、玄関の沓脱石の上に倒れている。すぐ目の前に、玄関戸が倒れ込んでいるのが目に入った。後を振り向くと、沓脱ぎの後の板が破られて、床下が奥の方まで眺められた。

「すぐ近くに直撃弾が落ちたのだ」と川村は直感した。

爆風で自分は沓脱ぎに飛ばされたのだ。玄関戸も爆風で飛ばされたのだ。

咄嗟に頭に浮かんだのがそれだった。

静かだった。深い静寂に襲われた感じだった。全てのものが動きを止めている。息を止めている。

静寂を破って、それまで茶の間にいた父が廊下を駆けてきた。父が何か云った。川村がそれに答えたはずだが、二人がどんなやりとりをしたか、何も覚えていない。

母が妹を連れて駆け戻ってきた。

父と母と川村と妹は、無事だったことを喜んだ。そのせいか、気持にゆとりが出て来た。みんなで家の中を見廻った。どの部屋もひどい状態である。天井板が垂れ下っている。その奥の屋根が一部剥がれ落ちて、その向うに青い空が覗いている。余りの被害の大きさに声も出なかった。

呆然と眺めている川村たちに、声が聞えてきた。

「空襲、空襲ですよ！ 敵機襲来！」

声は叫びながら、家の前の道を駆け上って行った。

川村たちは、とにかく避難しようということになった。

父は出勤を取り止めた。

母は、ずっと上手の山際にある知人のところへ避難することに、妹を連れて急いで出かけた。

川村は父と一緒に、すぐ上手の山際に出来ている隣組の防空壕に避難することになった。半壊状態で戸締りもできない状態の家をそのままにして急いだ。

その頃になると、小学校の方から道を上ってくる避難者が目立ち始めた。

川村は、父と一緒に家へ戻った。

戻る途中、坂道の下の方から避難してくる人々が列を作っているのに、川村と父は目を凝らした。

「一体これはどうなってるんじやろう」

と父が云った。

「これからどうすりゃえんじやろう。何か物凄いいことが起ったんじやあるまいか」

川村と父は家へ駆け込んだ。

廊下から川村と弟が使っている寝室に入ると、襖が吹き飛んだ押入れの蒲団の上に人が寝ている。半裸の中年の女だった。川村と父は呆然とその女を見やった。女は呻いている。近くに人がいるのに感づいたのか、川村に向かって喋り始めた。何を云っているのか分らない。女はひとしきり喋り続けた後、急に喋り止めると、ふーと大きな息をついたきり動かなくなった。

「これはもう駄目だろう」と父が云った。

「急いで救護所へ連れて行こう」、云いざま父は隣組用に備えてある担架を取りに駆け出して行った。

川村と父は、息を引き取ったらしい女を担架に乗せて、坂を小学校の方へ下って行った。

その間も市中から避難してくる人の列は延々と続いている。隣組の防空壕で聞いた話のように、どの人の顔も大きく腫れ上って、人間の顔とは思われない。体の前にかざし

防空壕は混んでいた。次々に避難してきた隣組の人たちが、異状が起った瞬間の恐怖を語り合っている。すぐ近くに爆弾が落ちたと思ったというのが大方の受け止め方であったが、後から避難してきた話では、「そうではないです。下の方から避難してきた人の話では、その人は市内の××町にいてやられたと云うとりました。××町というところ市の中心に近いところです。凄いい爆風で、道路を歩いている人がなぎ倒されるように倒れるのを見た、と云うとりました。こりゃあ大変なことになったようですよ」。新しく壕に入ってきた人が云った。「逃げてくる人はみんな火傷をしとります。それもひどい火傷をして、お化けみたいに両手を前にかざしておられます。ああ怖い、怖い」。防空壕の中の人たちの話は尽きることがなかった。

しばらくして、壕の中に静寂が訪れた。静まり返ってきた。隣組長が外の様子を見に壕を出て行ったが、やがて戻ってきて云った。

「どうやら敵の空襲はもうなさそうです。それよりも、市中から逃げてきた人たちによると、市内は火の海になっただけです。われわれはここでこうしてじっとしておる訳にはいきません。早く家に戻って、自分の身の回りを守ったほうが一番です。そういうことにしましょう」

それを合図に、隣組の人たちは一斉に防空壕を出て、自分たちの家へ向かった。

ている両の手の指先から皮膚片がぶら下っている。人々は一緒に、ウオー、ウオー、という声を発している。父と一緒に担架で女を運んできた川村は小学校の正門を入ってからすぐに続いている避難者の姿を目にした。校庭は彼らで埋めつくされている。彼らは一緒に地面に横たわり、呻き声を発し続けている。息絶えて身動きしなくなった者もいる。

川村と父は運動場の端に設けてある救護所のテントのところまで、女を乗せた担架を運んで行った。そこで係員にこれまでの事情を話して、女を受け取って貰った。

川村たちは、来た道を家の方へ引き返した。家に戻って、改めて中の様子を調べてみた。部屋のあちこちに天井板が垂れ下っている。壁には割れ目ができている。窓硝子も割れて、破片が飛び散っている。

一部が崩れた屋根の裂け目の向こうの青い空を見上げていた川村はふと思った。弟は無事だろうか。朝、元気な声で挨拶して出て行った弟のことが気になってきた。不安が募ってきた。建物疎開の現場で爆風を受けて倒れたとは想像したくない。多分、先生の指示でどこか物陰に避難したに違いない。大丈夫だろう。川村は繰り返しそう自分に云い聞かせた。

それでも心配になり、玄関の外へ出て、道の下の方を目で探してみた。

たのかと自分を責めた。そのことをひどく悔いた。悔いはいつまでも残った。

女先生と女の子たちを見送って家に帰った川村は、弟がどうしているか気になってじっとしておれなくなった。弟を探しに行ってみようと思った。市中から通じている道は家の前の道しかない。弟は必ず家の前の道に戻ってくる。道を逆に辿って行けば、帰ってくる弟と会えるはずである。

川村は父に声をかけておいて、家を出た。

避難してくる人たちに逆らうように坂道を下って行った。小学校の前を過ぎた辺で、川村は奇妙な幻想に襲われた。自分は地球人ではなく、どこかの天体からやってきた宇宙人ではあるまいか。いま目の前を自分とは逆の方向に列をなして進んでいる人たちが地球人であることは間違いない。あの人間らしくない顔に変貌した人々ばかり見ていると、自分はある人たちは違う存在としか思えない。かれらが地球人なら、自分はいかに背いている。かれらに拒まれていくのを感じながら、川村は必死で前を見つめて進んだ。早く弟を見つけたかった。

小学校前を過ぎて一分も経っていないかった。避難者の列からいきなり声が呼んだ。

「お兄ちゃん」

市中から避難してくる人の列はまだ続いている。何度目かに玄関の外へ出て見たとき、下から上ってくる一団が目に入った。幼稚園の女先生らしい人とそれを取り囲んでいる四、五人の女の子たちだった。みんなで声を合わせて歌いながら上ってくる。女先生と子供たちは手をしっかり握り合って歌っている。

川村と女先生の目が合ったと思った時、女先生が川村の方へ近づいてきながら問いかけた。

「この辺に救護所はないでしょうか」

川村は反射的に答えた。

「救護所は小学校にあります。小学校はこの道を下りて行った右側です」

「そうですか、ありがとうございました」

女先生は川村に礼を述べて、女の子たちに向かって、やさしい声で云った。

「救護所はこの坂の下の小学校にあるですよ。みんな一緒にそちらへ行きましょう。みんなで歌を歌いながら行きましょうね」

やさしく話しかけて、女先生はいきなり声を張り上げて童謡を歌い始めた。女の子たちがそれに習った。女先生と子供たちは歌いながら坂道を下って行った。

後になって、川村は、あの時どうして自分は女先生と女の子たちを案内して小学校の救護所まで連れて行かなかった

川村にはそう聞えた。弟だ。避難者の列の中に弟の顔を探した。どこにも見当らない。戸惑った。

「お兄ちゃん」

声は二度呼んだ。弟の声だった。

川村は立ち止まった。大きく目を見開き、注意深く丁寧に列の人の顔を一人ずつ確かめてみるのだが、弟の顔は見当たらない。

その時、列の中から一人、人間ではない顔が出て来た。

「お兄ちゃん」

その顔の少年が川村に近寄ってきた。

川村は、その少年が弟だとは信じられなかった。

「克二か？」

川村は少年に向かって弟の名を云った。

「克二です」

と少年は答えた。

川村は少年の答えが信じられない。同じ質問を繰り返した。

「川村克二か？」

「はい、川村克二です」

少年は語調を強めて答えた。

川村は、それでもまだ信じられない。次の質問をした。「お父さんの名前は何と云うか、お母さんの名前は？」

少年は、父と母の名前を正確に口にした。

それでもまだ川村は信じる事が出来ない。少年を上から下まで注意深く見つめた。帽子を被っていない丸刈りの頭の下に、火傷で脹れ上がった皮膚が貼り付いている。眉も鼻も消えている。臉も見当たらない。その臉と思われる部分が微かに動いて開いた。眼玉が光ったと思った。

着ているシャツはぼろぼろに千切れている。ズボンもベルトの周りだけが残り、それに布切れがぶら下っているだけである。弟はトランクのベルトをズボン用に使用していた。

「これは弟だ。弟に間違いない」

その顔を見つめて、川村は声を殺して泣いた。口の奥から押し上ってくるものを呑み込んだ。

弟の横に弟と同じような顔の少年が立っている。

「友達を連れてきました。A君です」

と弟が紹介した。

「Aです。よろしくお願いします」

と友達が挨拶した。

「さあ、帰ろう」

と川村は弟たちを促した。

三人は小学校の前を通り、坂道を家に向かった。

だった。

川村は書斎に入って机に向かってみた。

この先どういうことになるのか、見当もつかなかった。動員工場のこと、学校のことを頭に浮かんで消えた。その他のことは何も浮かんで来ない。気がまとまらないまま弟たちのところへ戻った。

弟とA君の会話は途切れては続き、続いては途切れて、相変わらず元気だった。

しかし、時間が経つにつれて、二人の様子に変化が現れてきた。A君が突然声を張り上げて訳の分からないことを喋り出した。しばらく喋り続けて疲れたのか、急に静かになり、眠っているらしく上を向いたまま身動きしない時間があるが、いきなり声を張り上げて喋り出すので、隣に寝ている弟がびくつと体を震わせるのが分かった。父が心配して、弟を隣の部屋に移した。A君の様子が極端に変化したのはその直後だった。

A君は左右に体をねじって身悶えしたり、不意に起き上ろうとしたりして激しい動きを繰り返していたが、首を振って喚きながら手を空にかざして何かを掴みとろうとする仕種をして、強い調子で云った。

「あそこに、赤い服を着た女の人……赤い服を着た女の人！」

喚きながら、空にかざした両手を左右に振り廻し、同じ

川村たちを待つていた父は、弟たちを見て声も出ないのか、ごくと唾を呑み込んだまま無言で迎え入れた。

川村と父は急いで床の間ある座敷の畳の埃をはたいて、そこに蒲団を敷いて弟と友達を寝かせた。

父はひどくうたえていて、何も手につかない様子だった。とにかく後のことを父に頼んで、川村は、上手の山際の家に避難している母を連れ帰るために家を出た。一緒に家へ引き返す途中、母は弟の顔を見るのが不安らしく、道を上ってくる避難者の姿を見ては、「ああいう顔になつたらね」と何度も聞いた。

家に帰って弟を見た母は、しばらく声もなく立ちつくしていたが、気を取り直すと、弟の枕許に座って、やさしく話しかけたりした。友達にも同じように話しかけた。その後で、急いで台所へ向かった。それからの母の動きは驚くほど早く、きびきびしていた。

食用油を綿に浸して弟と友達の顔の火傷に当ててやったり、新しい浴衣を着せたりした。川村にはできないことだった。

母はまた、どんなに欲しがっても水だけは絶対にやっつてはいけなさと云った。ひどい火傷を負ったものに水を飲ませると生命が危険にさらされるのだと云った。

弟と友達のA君は仲が良いらしく、互いに励ましの言葉を掛け合ったり、声を合わせて校歌を合唱したりして元気

言葉を繰り返す。

「赤い服を着た女の人……」

A君の目には赤い服を着た女の人が見えるのだろう。

「こりゃどうもおかしいぞ。気が狂うたんじゃなからうか」

父が近寄って、A君の両手を押さえて体を上に向け変えた。A君は静かになったように見えたが、すぐに発作が始まった。

「赤い服の女の人」

A君は繰り返して叫び、両手を空にかざして振り廻した。やがて、叫び声が糸を引くように細く弱くなって消えた。次にひと息深く吸い込んだと思った。A君は動かなくなつた。

父が駆け寄ってA君の顔を覗き込んだ。鼻と口に耳を寄せて呼吸を窺った。

顔を上げた父が首を横に振って、吐き捨てるように云った。

「駄目だ、駄目だ。救護所へ連れて行こう」

近くに置いてあった担架を持って来て、A君を乗せた。

A君は何の反応も示さない。

父と川村は、A君を乗せた担架を運んで小学校へ行った。弟の克二は始終静かだった。眠っていたのかもしれない。小学校の運動場に設けられたテントは死体収容所に変わ

っていた。救護所は校舎の二階に移ったということだった。死体収容所の係員は、運んで来たA君をひと目見て、死亡していると云って死体を引き取ってくれた。父と川村はA君の遺体に手を合わせた。二人は家へ引き返した。

川村たちが帰るのを待ち兼ねていたように、弟が口を開いた。

「A君はどうしている?」

父が咄嗟に答えた。

「A君はさっき帰って行ったよ。克二が寝ていたから黙って帰って行ったよ」

弟は納得した。

弟が苦しみ始めた時はまだ陽が高い時分だった。弟の呻き声が部屋に響いた。苦しみ弟をこのまま放っておいては可哀想だと、小学校の救護所で治療して貰うことにした。父と川村は、弟を乗せた担架を運んで坂道を下って行った。これで同じ道を担架で三回往復することになるのだった。

小学校の校舎の廊下は避難者で溢れていた。その中を担架で二階の救護所へ急いだ。

救護所では軍医が怪我人の治療に当たっていた。連れて行った弟を見て、軍医は首をかしげた。「これはもう駄目だ

すよ。念のためにカンフルを射っておきましょう」と弟の腕にカンフル注射を射ってくれた。

注射のせいも、弟の苦しみはいくらかやわらいだように思われた。再び弟を担架に乗せて、家まで連れて帰った。

坂道は強い陽射しのはね返りで熱気が漂っていた。

注射が効いたのか、家に帰った弟はそれまでとはずっと楽になったらしく、蒲団に寝かせてしばらくすると、軽い寝息が聞こえた。川村たちはほっと胸を撫で下した。

家の中に静寂が広がった。

夕方近く、空がにわかには曇ってきた。黒い雲が垂れ込めた空から雨が降り出した。いきなり激しく降り始めた。その雨はいつもとは違って、黒い油様の雨粒が地面を叩きつけるように降り続いた。雨はパツと降り止んだ。すぐに元の青空に戻り、夕陽が明るかった。

川村は朝からの出来事を忘れたように安らかな気分になった。静かに眠っている弟を見て、元通り元気になるだろうか、元気になってほしい、と祈る気持だった。

日が暮れかかるころ、露地の奥の方から男の声が敵の空襲を知らせながら駆けてきた。

「敵B29爆撃機の編隊が四国沖を北上中です。避難して下さい」

男の声は落着いていて、紙に書いた文章を読みながら歩いている感じだった。

「落着いて避難をお願いします」

丁寧な云い方で伝えながら遠去かって行った。

川村は、もうこの街は空襲されることはあるまいと思っただけの理由が見つかからない。万一の場合を考えると、取り敢えず避難した方が安全だという結論になった。

弟に事情を説明して、担架に載せた。

父と川村が担架を待ち、母と妹が付き添った。

川村たちは、露地を抜けて坂道を下り、石橋を渡って坂道を上って向うの山際の道に出た。その山際の道を上手の方へ行って見ることにした。危険の少ない場所を探すことにした。

先刻まで空を赤く染めていた夕焼けも色を失い始めていた。夕闇が迫っていた。

川村たちは、薄暗くなった山沿い道を黙りこくって歩いた。風もなく、静かだった。

やがて陽が落ちたが、空に月があったので暮れ切ることはなかった。やわらかい月光が辺りを明るくしていた。

山沿いの道はかなり進んだころ、道幅が少し広くなった場所があった。

「ここらでよかろうかね」

と父が云って、担架を道端の草の上に降した。そこから細い道が上へ上っている。その細道の上方に、

山肌にくつつくように建っている一軒の家が見えた。

川村たちは、弟の担架を中にして道端の草の上に腰を下した。

草の中で虫が鳴いている。

川村は暮れ切った周辺の風景に目をやった。自分たちがやってきた方角の、ずっと彼方の市の中心部と思われる辺りの空が赤く染まっている。市内は朝の爆撃で起った火事が消えずに燃え続けているのだ。

目を正面に向け直して眸を凝らした。

彼方に見える低い山々の黒い縁取りのあちこちから、火の玉がいくつも昇っていくのが見える。火の玉は、死んだ人間の体内を脱け出た黄燐が空気に触れて光を発しながら上昇するものと聞いている。

無数の火の玉だった。市中から避難して山際に辿り着いた人々が、それから長い時間苦しみ続けた後、いま、息を引き取ったのだった。

川村は火の玉を見やりながら、この日の今、あれだけの死者が昇天したのだと思った。

余りのおぞましさに、体が冷えてきた。底冷えがしてきた。身を震わせながら、彼方の火の玉から目が離せなかった。

弟に変化があらわれたのは、避難して来てかなり時間が過ぎたころだった。

弟は初めのうちは母と穏かに話していた。母の問いに、爆弾が落された時の作業現場の様子や自分たちの様子などを低い声でこたえていた。ある瞬間、弟の声が変わった。それまでの話とは何の脈絡もない事を話し始めた。声が次第に大きくなり、叫ぶような喋り方になった。何を話しているのか理解できない。

母がしきりに弟の胸のあたりをさすってやったが効き目はなかった。

父が母に代わって胸をさすってやった。

弟は苦しがり、身を悶え、身をねじっては喚き叫んだ。

その叫びがびたりと止んだ。同時に動きが止まった。

母が呼びかけた。父も呼びかけた。川村も妹と呼びかけた。何度も呼びかけた。弟は答えない。びくりとも動かなくなった。

「弟は死んだのだ」と川村は思った。涙が込み上げてきて嗚咽した。

父と母も妹も弟に呼びかけながら泣いた。

その時、上方の家から誰かが出て来た。その人は細い道を下りて来て、川村たちのところで立ち止まった。中年の女性だった。

「ただ今、坊ちゃんがお亡くなりになりました。どうぞこれで夜露を凌いで上げて下さい」

女性はそう云って、持ってきた簾すだれを父に手渡すと、しゃ

がんで弟に向かって掌を合わせて、川村たちに挨拶して帰って行った。

あの女性にどうして弟の死が分かったのかと、川村は不思議に思った。ひよっとして、死んだ弟の体を脱けた黄燐が火の玉となって上昇するのを目にしたのかもしれないという気がした。

川村たちは、息を引き取ったと思われる弟を載せた担架を運んで家まで帰った。

座敷に敷いた蒲団に弟を寝かせた。

枕許に練香を立てた。

母が白布を出してきて白衣をつくった。その白衣を弟に左前にして着せた。

弟の体はまだいくらかぬくもりを残しているようだった。

川村は弟の枕許に座って、じっと目を閉じていた。これまでの弟との思い出の数々を頭に浮かべてみた。

深い静寂を破って、弟の咽喉がグーと鳴った。

川村は急いで顔を弟に近づけた。

その時、弟の咽喉の奥から、息とも声ともつかぬ音声が押し上ってきた。

「お・か・あ・ちゃん」

川村にはそう聞えた。急いで母を呼んだ。

「今、克二が、おかあちゃん」と云ったよ」

母が駆けてきた。いきなり弟に蔽い被さって呼びかけた。

「克二……克二ちゃん！」

弟の体は急速に冷えていった。

弟は、母に会うために、母を呼ぶために死と闘っていたのだ。やっと思いを遂げて安堵したのだろう。

川村は泣いた。

「克二、克二」と弟の名を呼んでは泣き叫んだ。

町内会長のところへ行っていた父が帰ってきて、弟がいま本当に息を引き取ったと聞くと、声をあげて泣いた。

一刻後、近くに住んでいる日赤の看護婦に来て貰い、弟の死を確認した。

その日の夕刻、近くの焼き場で弟を荼毘に付した。

十三歳だった弟は、八月七日の朝、昇天した。

川村は、橋から先へは行かずに引き返した。

川村の気持は揺れていた。四十年以上前の出来事が今の彼を強く揺さぶっている。実は、彼はあの日からずっと揺さぶられ続けてきたのだと感じた。揺さぶられ通して、自分の真の生き方ができずにここまで来たのを悔いた。自分が歩んできた人生は偽りだったのかと疑いさえした。偽りの生き方をしてきた自分がここにこうしているのを自分の目で見たのだ。

このような自分のこれからの誰の手に委ねればよいのだろうか。古臭い言い方かもしれないが、神の手か？ 日本

流に仏の手か？

氣持が定まらないまま、露地を通過して入口のところまで戻ってきた。

強い疲れを覚えた。

露地の入口に立って、ほんやり周辺を眺めた。

自分自身を見失っているいま、これ以上この町に思い残すことは何もなさそうだった。

人通りが途絶えたのを見て、川村は道路の中ほどまで行って、上手の方へ向かって立った。道の上手の、さらになつと上手の方を見つめて、呟くように云った。

「ありがとう。さようなら」

そして、くるりと向きを変えると、先刻上ってきた道路を、ゆっくりとした足取りで下って行った。

振り返ることはなかった。

(「安藝文学」87号より転載)

全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞改訂

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設します。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程（改訂）

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから優秀賞を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌優秀賞を贈り、さらに選考の上6篇前後を最優秀賞選考の候補作品とする。最優秀賞「まほろば賞」には賞金10万円と賞状・記念品を、優秀賞には賞金2万円と賞状・記念品を贈る。（賞金は、できる限り有志の寄付を募り、その寄付金によって、運営する）
- ② 毎年選考委員による選考会を行ない、候補作品について十分な討議を重ね、最優秀賞「まほろば賞」その他を決定する。
- ③ 最優秀賞「まほろば賞」は一人が原則だが、複数もありうる。
- ④ 次点には特別賞を授与する。特別賞賞金5万円および賞状・記念品を贈る。
- ⑤ 選考委員は別に賞を授与することができる。五十嵐勉賞など。
- ⑥ 全国および海外からの送付による投票により、「読者賞」を決定する。
- ⑦ 読者賞の投票は極力選考会までに行う。
- ⑧ 河林満賞は賞金5万円と賞状・記念品を贈る。
- ⑨ 最優秀賞選考結果を「文芸思潮」に発表する。
- ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。
- ⑪ ポピュラー（大衆）部門、評論部門も設ける方向で整えていく。

●この全国同人雑誌賞「まほろば賞」は、文学を愛する方々の賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ読者賞に投票されて奮って御参加いただくことを切に願いますしだいです。

2015年6月24日（改訂）

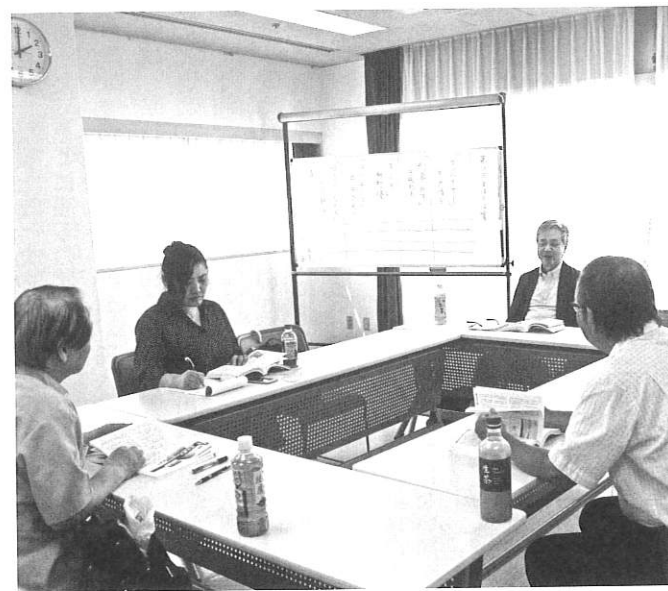
全国同人雑誌振興会
文芸思潮

ぞましい」。ずっと語り継ぎたい、残していくべき小説である。

「河林満賞」を受賞したのは、緑町優氏の「スミオ」だ。喧嘩の強い「あたし」かつこは、一つ下の美少年スミオが気に入り、女装させて遊んでいた。かつこはスミオの美しさ、スミオはかつこの強さに憧れていた。だが、スミオは難しい病気を抱えており、年齢を重ねることに弱っていく。中学生になり、昔女装させて外を歩かせたことを謝るかつこに、スミオは、自分は「自由に歩いていたいんだ」と話す。そして、その「自由」を、化粧をし、母の赤いワンピースを来て病院内を歩くことで、再び叶えた。その、儂い命の灯の最後の輝きは、涙を誘う部分である。スミオは亡くなる。だが、物語は悲劇で終わるのではなく、かつこが「次の百人の」スミオを助けるために医者への道を進むというその後の展開が、前向きな未来を読者に提示する。また、男勝りだったかつこだが、スミオの手刺繍の花があらわれたブラウスを纏うと、いつの間にか似合うようになっていくことに気付くといった、一人の女性の青春物語としての要素も見逃せない。読み終わったあと、胸がいっぱいになっていく自分に気付いた。

どの作品も本当に素晴らしかった。木戸順子氏の「サンバイザー」は、夫に触れられたくない妊娠恐怖症を扱った作品であった。共感する読者が多そうだ。武田順子氏の

「森で」は、自由であり、無数の選択肢があるがゆえ、より良い未来を求めすぎて占いにばかり頼ってしまう現代女性の影の部分が描かれる。宇梶紀夫氏の「刑事死す」は、父親の「獅子になれ」という言葉に翻弄される刑事の物語だ。走り抜けるような展開に、映像が生き生きと浮かんできた。



まほろば賞選考会風景 2019.8.4 大田区民プラザ会議室で

あなたも 文藝家協会に入りませんか！

公益社団法人日本文藝家協会は創立 90 年を超える文学者団体です。著作権の保護、法律や税務に関する相談、健康保険、文学者の墓、『文藝年鑑』の編集などの活動を続けています。『文藝年鑑』に名前も記載されます。年に一度の総会で、作家の懇親会も催されます。

入会資格は「文芸的著述を主な活動としている」文学者です。プロの作家だけでなく同人誌で活躍されている方にも資格があります。理事などの推薦が必要ですが、活動を証明する同人誌のバックナンバーなどがあれば事務局で紹介します。

会費などの詳細については事務局にお問い合わせください。

公益社団法人 日本文藝家協会

〒 102-8559

東京都千代田区紀尾井町 文藝春秋ビル新館 5F

☎ 03-3265-9657 bungei@bungeika.or.jp

<http://www.bungeika.or.jp/>

坂を上りながら

安藝文學



87号

同人雑誌優秀作



石田耕治

いしだ こうじ

1930 広島生まれ

広島大学政経学部卒

旧制中学4年の時、自宅で被爆。動員で被爆した弟が翌日死亡

旧制高等学校時代に同人雑誌に習作を発表。大学卒業後銀行に就職するが、一年で退職して上京。原爆を「頭で知った事実ではなく、手足で感じた情景」として描き続ける

「飢えの原因」「靴」「雲の記憶」「死の壁の中で」「この日」「相生橋」など

破壊者たち
五十嵐勉

広島へ原爆投下に向かうB29の乗組員たち。殺戮の果てしない行軍を辿るカンボジアの少年ポル・ポト兵。さらに平和な東京のマネキンを壊すアルバイトの中に潜む破壊の連鎖。破壊者たちの行方を追う新・破壊小説

アジア文化社

文豪の遺言
木内是壽

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最期の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

アジア文化社

安藝文学 広島県

六十年の伝統雑誌

この二、三年間におそわれた異変をどうして並みのものと云えようか。災厄の「平成」と総括されるのと歩調を合わせたような。そうちゃかして仕舞おうかな。
 抑も、昭和三十三年（一九五八）五月創刊、爾来（しらい）の消長に波だちは当然として、激変とみなすほどの危機的な状況に直面したことなく、したがって傍目には安定した、息のながい集団と見えたにちがいない。事実、戦前・戦後の広島において、散文の分野で長期にわたる活動を維持し続けたサークルは他に例を見ないのである。

尤も、持続こそ力と自負し、誇るには足りない。ただ、結末の結びが纏れみだれたり、四散の憂き目は見なかったであれば、確かに独自の成り立ちを築きあげたのであった。

昭和三十年代後半は、全国的な文運活発化の上げ潮であり、地域において個々の集団が競い合い、あるいは連帯の行動を誘い、反目と批判の自由をわが糧になしえる最善の時代であったと顧みる。
 それは不思議なほど熱気にみちた時期でもあって、「文

全国的な文運活発化の上げ潮に乗る創刊

芸年鑑」（年刊・日本文芸家協会編・新潮社刊）に登載、記録された同人誌関連の記事にみる、主な誌名のほとんどがかつての気運のなかで生まれ、現在に続いているのを一瞥するだけで、その時期の熱気のほどが容易にうかがわれる筈である。

「安藝文学」もこの時流に乗り、数名の知己が寄り合った喫茶店の一隅から始まった。

半年後、創刊号の薄い冊子の束を風呂敷包みにして、本通り筋の古本屋へ赴いた。十冊ほどなら預かってもよい、納品書を出せ、といった返事を得、最寄りの文具店で「納品書」綴りを買ひ、「納品書」を渡したときの有頂天ぶりは、永いあいだの嬉々たる伝聞となつたものだ。（それによ、短期間で完売を見届けたんだ、ヤル気を見

▲私宅を会合の場にした一回きりの場面



煽られちゃったね)

なによりも長幼序列の排斥に徹した方針のもと、相互の対等を旨とする拡大の方策に寛容だった。（地元の新聞が発刊のたびに、気恥ずかしいほどのスペースでもって、喧伝し、月を追うことなかが増えたとってわけ）

年二号の刊行を目標に掲げながら、結果的にはそのような実績を積みかねたとはいえ、また定期的な発行の墨守にルーズだったのは、それなりの弁明をあげ得るにせよ、つまりは自作の活字化を最優先にはしない、暗黙のきまりを互いに認め合う寛容を無下にはしなかったからである。

これらの事柄は、広島地域の、たとえば昭和三十年代後半から四十年代にかけて創刊を競い合ったグループの短命ぶりを逆照射するだろう。

なかには、主宰格の人物が是認しなければ掲載・発刊しない方針を維持し、このため同人たちは別の集合体をつかって創刊、母体の誌名は自然消滅、といった事例もある。

定例の集会のほか、本誌とは別に「会報」の発行を続けた。今年三月現在で650号に到達。B4サイズの四頁を基本に六頁、八頁など時に応じて伸縮自在なスペースが他地域に居住する同人間の交流・発言の場として活用され、また意志疎通の持続がグループ運用にもたらした裨益（ひえき）をも挙げておかねばなるまい。

毎月発行の「会報」は、遠隔の地にある同人たちに待望される音信の役をかねており、メール発信を利用できない向きにもその定期発行が必須のルートになり得ていることへの留意が「結束」の保持と無縁ではないはずだ。

こうしてひとつのエポックを劃したのが、『選集・安藝文学』第一集の刊行だった。ハードカバーの単行本、長期保存を見込んだ企画であった。四〇〇頁。同人二十七名の小説・エッセイ選集。平成二十五年十二月（溪水社刊）

作品は、自選をも受け入れながら、次のような構成に編纂された。

小説の部

第一部 郷土史への視座

第二部 遠きしるべに

第三部 時空を超えて

第四部 情念のまなざし

ESSAYの部 十篇収録

この企ては、その後、継続の要望に添い、二集編纂の刊行企画まで進行、本誌刊行を優先するため、一時、先送りに置かれている。

創刊当時、一〇〇号まで出すというのが目標であった。

その数字は遙か彼方にかがぶ陽炎の如きに見えたものだが、いま、八十八号の原稿を揃え、穴埋め等の処理が済み次第、印刷に入る見通しである。一〇〇号の数字がもう間近か、と改めて感に耽るのではなく、先途を急ぐ喫緊の日日を閲しているのである。

そこへ、近年の異変遭遇ときたのだった。定例の同人会后、二次会へ移動するのが常であったが、予約人員の減小に歯止めがからなくなった。

転倒、膝を痛めて長期療養に入ったもの。こまめな健診にもかかわらず、痛が発見され、術後には全身転移、ついで早々と黄泉の国へ。認知症の徴候悪化、施設住まいのもの。まるで超高齢層のマイナス症候群一覽にも似た疾病に阻まれ……、無念なことに定期集會は一時棚上げ扱いの、これが異変の正体なれば、この頁に掲げる一葉の写真が昔日のいともご機嫌な面々のみを留めているのも、むべなるかな。

(岩崎清一郎)

安藝文学

同人会事務局

〒七三二・〇〇〇一 広島市東区戸坂山根2・10・25

TEL 082・229・2869

Mail: akibun@song.ocn.ne.jp

「安芸文学60号発刊と文沢隆一「鳴外をめぐる女たち」刊行を記念する集い」

平成4年11月15日 於 ホテルチュールリッヒ



某年の花見の帰り、いまはなきバー「とんがらし」に立ち寄って

森で

武田純子

目覚まし時計が三度目の警告音を鳴り響かせたところで、ようやくベッドから体を起こした。のしかかるまぶたで洗面台に向かい、髪を結んで顔を洗うと、やっと視界が開けた。パンをトースターに放りこみ、牛乳をコップに注ぎ、昨日の残りのスープをチンする。ふと時計を見ると六時五十七分。

「あつ、今日は月曜日だ」
ベッドの置いてある八畳の部屋に走り、テレビをつける。と、ちょうど『ロレーヌ高宮の今週の運勢』が始まった。ロレーヌ高宮先生の占いはよく当たる。毎週月曜日の朝の二時間。これを見ないと一週間をどう過ごせばいいのかわ

からない。

「今週いちばんラッキーなのは、水瓶座のアナタ。能力以上の仕事をこなせるわ。積極的にトライして。ラッキーアイテムは杏仁豆腐」

やった。水瓶座は今週ラッキーなんだ。気が重い一週間の始まりだけど、やる気が少し出てきた。

朝食を口に放りこみ、身支度を整えて、一人暮らしのアパートに鍵をかける。駅へ歩きながら、能力以上の仕事って何だろうと考える。積極的にトライは面倒だな。でもロレーヌ高宮先生がそう占うのだから、その通りしなければならぬ。

駅前のコンビニに入る。まっすぐスイーツコーナーへ向かうと、私を待っていたかのように杏仁豆腐が整列している。迷わずひとつを手に取り、レジに並んだ。

「朝井さん」

昼休み、コンビニのおむすびとサラダ、杏仁豆腐を食べ終わってお手洗いへ向かう途中で、係長に声をかけられた。

「はい」

足を止めると係長は満面の笑顔でそばに立った。うちの会社の女性社員の多くが見惚れる甘い口元が目の前にある。「こないだ話したフレンチの店だけど、ぜひ朝井さんを連れて行ってあげたいんだ。仕事のこと話したいこともあるし。明日の夜は空いてるかな」

「明日ですか」

仕事のことなんて口実なのは、お互い分かりきっている。女性社員たちが憧れるこの人が、なんで私に目を留めたのだろう。ロレーヌ高宮先生の占いを思いだした。能力以上の仕事にトライしてみて。仕事じゃないけど能力以上ではある。トライしてみようか。

「空いてます」

「良かった。じゃあ楽しみにしてるから」

爽やかな香りを残して、係長は去っていった。スーツの背中まで隙のない身のこなし。惚れ惚れする。これで妻子

持ちでなければ、文句のつけようがないのだけど。

いったんお誘いを受けたものの、夕方になるとだんだん迷いが生じてきた。やはり既婚者はまずいのではないか。

実際に発展しても、私が苦しい思いをするだけな気がする。でも、あんなかつこいい人と付き合える機会なんて、そうそうないし。どうしよう。

考えこむうち、いつのまにか指が、友人の奈緒に電話をかけていた。

「はい、もしもし——」

「もしもし、今いい？」

「うーん、ちょっとバタバタしてるけど、少しならいいよ——」

電話の向こうで泣き声が聞こえる。奈緒の二人の子どもどちらかだろう。

「忙しいところごめんね。またタロット占いをお願いしようと思つて」

「ああ、いつものね。こらっそこ触らないの！……ごめん子どもが——」

「こっちこそ忙しいのにごめん。それで占ってほしい内容は、会社の上司に交際前提と思われる食事に誘われて、それに乗ってもいいかどうか、なんだけど——」

「ん。分かった——」

「食事の日は明日だから、できれば明日の朝までに分かれ

ば嬉しい」

——明日の朝か……だから触らないでって言うてるでしょ。お母さん電話すぐ終わるから、ちょっと待ってて——
奈緒は子育てにてんてこまいだ。無茶言ってるな、私。でも悩ましい選択は奈緒の占いがなくともどうにもならない。昔からずっとそうだった。

——やっつてはみるけど、もし朝に間に合わなかったらごめんね——

「うん、どうかよろしく」

電話を切り、間に合いますようにと祈る。一寸先は暗い闇に包まれて何も見えない人生を、自分一人の決断だけで進むなんて、私にはとてもできない。係長と交際するかどうかという選択さえ、どんな落とし穴につながるかわからないものではない。占いが進むべき道を教えてくれるから、なんとか毎日をごこなしているのだ。奈緒とロレーヌ高宮先生ののおかげで、私は生きている。

奈緒とは中学校以来、十五年以上の付き合いになる。霊感が強くタロットカード占いが得意でよく当たるといふことで、私やまわりの友人たちは、こぞって奈緒にお世話になった。高校も一緒に、大学は別になったけれど、私自身あることに奈緒に占いをお願いした。恋愛のこと、自身自身のこと、進路のこと、人間関係のこと。奈緒は喜んで占い、

アドバイスをしてくれた。今の会社に就職したのも、奈緒の占いで良い結果が出たからだ。

奈緒の占いに従って、失敗したことはない。一度、交際すると良くないという結果が出たにも関わらず、その男と交際してしまったことがある。束縛がひどく、男友達と話しただけで怒鳴るようなやつだと次第に分かり、散々だった。奈緒のタロットは当たったのだ。

夜遅く、奈緒からメールが来た。

——占いました。過去は「恋人」カードの逆位置、現在は「悪魔」カード、未来は「塔」カード。もしかして相手は彼女持ちか既婚者？ 異性関係が乱れた相手で、この畏に引かかったらひどい目にあう。誘いには乗らない方がいい——

さすが奈緒。既婚者ということまで分かるとは。奈緒にお礼のメールを返す。明日、係長にお断りをしよう。

先週、毎日コンビニの杏仁豆腐を食べたせいか、胃がもたれている。ラッキーアイテムのはずなのに、何がいけなかったのか。今週のロレーヌ高宮先生の占いは何だろう。「運勢九位は水瓶座のアナタ。期待しすぎるとがっかりするわ。理想は低めに持って。ラッキーアイテムは除菌グッズ」

星座占いは、西洋占星術に端を発している。占星術とは

太陽・月・惑星などの天体の状況を基にした占いで、古代には天文学と関係していた。現代ではなんでも科学で説明されて、大人が占星術を信じていたら笑われるけれど、古代においては大まじめに国や社会を左右してきたのだ。もつと言えば、占星術が真剣に語られる期間の方が、語られない期間より長かったはず。だから私は星座占いは当たると信じている。

出勤途中のコンビニで買った除菌ウェットティッシュで会社のデスクを拭いていると、ドアを開けた係長と目が合った。含みのない朝の挨拶をする。断られてプライドが傷ついただろうから、もう誘ってはこないだろう。少しもったいない気がする。

昨晚、実家の母からかかってきた電話をふと思いだした。——あんな、彼氏いないの？ もう三十歳になるんだから本気で考えないと。島根に帰ってくるんだしたら見合い相手を探してやるって、お父さん言ってるよ——

広島に住むようになって十年以上。いろいろ便利なので島根に帰るつもりはない。彼氏は二年前からいない。結婚もしたいが、なかなかこれぞという相手が見つからない。

「理想は低めに持て、かあ」

職場の独身男性の顔を思い浮かべて、首をひねる。私はどんな人と付き合って、どんな人と結婚して、もしくはしない、どんな生活をし、どんな人生を繰り返して、どんな

老後を迎えるのか。まったく分からない。誰にも分からない。科学がいかに進歩しても、人類が火星に移住するようになってからも分からない。周囲がまったく見えない真つ暗な森で、一人ぼつんと立ち尽くしているようなものだ。でも止まることは許されず、歩き続けなければならぬ。進むべき方向も分からないが、足を出さねばならない。北に行っておけば、わずかな雑草のみに覆われた歩きやすい地面が広がっていたのに、南に行ってしまったばかりに崖から転げ落ちるかもしれない。

でももしかしたら、神仏や天や神秘的な力なら、分かるのではないか。どの方向へどのように進めばいいのか、彼らなら教えてくれるのではないか。少なくとも、科学よりは。天を仰いで神秘的な力で星を読む。神秘的な力でカードを引く。そしてお告げに従って、私はこわごと右足を闇の中へ出す。

後輩に告白されたのは、突然だった。私に好意のあるそぶりなどまったくなかったのに、ある日の飲み会の帰りにいきなり「朝井さんが好きです。付き合ってください」と言われた。

「す、少し考えてもいい？」

「はい」

走って逃げて終電間近の駅に駆けこみ、震える手でパッ

グから携帯を引っぱりだし奈緒の番号を探した。

「……もしもし——」

「もしもし、あのっ奈緒」

「寝てたから頭がぼーっとして……何——」

「あつ」

時計を見る。しまった、他人に、それも子育て中の母親に電話をしていい時間ではない。慌てていて気が回らなかった。

「ごめん、いつものように占いを……」

「ああ……。明日は保育園の行事で朝早いから、今すぐは無理。内容をメールで送つといて。明日見るから——」

「分かった。ごめんね」

電話を切る。自分のわがままで奈緒の生活を乱してしまいが痛む。一方で、奈緒はいつタロット占いをしてくれらるだろうと不安になる。明日は行事だと言っていた。イエスカノーか、後輩に返事をしないわけにはいかない。とりあえず奈緒にメールをした。早く返事が返ってきますように。

返事はなかなか来なかった。木曜に告白されて、金曜の会社では後輩からできるだけ目をそらした。今日を乗り切れば土日で休みだ。月曜までには返事が来るだろう。

しかし日曜の夜になっても占いの結果は来なかった。どうしよう。明日会社で、後輩にどう接すればいいのだろう。

しまったような気はするけれど。それは気のせいに過ぎないのだ。きつと。

高度を下げてきた太陽が、斜めに光を伸ばす音楽室。そこは音楽の授業を受ける場所であり、私たち合唱部の部室でもあった。高校校舎四階の西端。高校のことを思い出す時、教室より先にこの部屋を思い出す。部活のない日の夕方、私と奈緒、他に二人の友人が、机を挟んで丸く座っていた。高校生女子が四人もいるのに物音ひとつしないのは、音楽室の壁が音を吸収するからではない。全員黙ってタロットカードを見つめているからだ。奈緒の右手が最後のカードをめくる。

「うん、いいカードが出てる。告白、してみたなら」

奈緒の言葉に友人が頬を染める。「で、でも」

「頑張ってみなよ。あいつ彼女いないし、大丈夫だって」

私は友人の腕を軽く叩いた。

「次は奈緒とタカギ先輩のこと占ってよ」

「えっ、私のこと？」

「最近すごい仲いいじゃん。先輩、奈緒のこと気に入ってるらしいよ」

「うん……」

奈緒はカードを裏向きのまま両手でかき混ぜ、集めて何度かカットした。そのまま重ねて置き、上から一枚ずつめ

奈緒にもう一度お願いしようか。それはあまりに、ずうずうしい。眠れないままベッドの上で体の向きを変え続け、いつしか寝入っていたらしい。目が覚めると朝で、奈緒からメールが入っていた。

「遅くなってごめん。過去は『正義』カード、現在は『愚者』カード、未来は『節制』カードの逆位置。これまでは会社の先輩後輩でいい関係だったけど、彼は未熟なんだね。お互いのプライドや幼さでうまくいかなくなるかも——」

そうか、付き合ってもうまくいかないのか。後輩のこと、わりといいかな、と思っていたので残念だ。タロットのお告げに従って、後輩にはお断りをしよう。その旨とお礼を書いたメールを、奈緒に送った。するとすぐ返事が来た。

「いいと思ってたなら占いに左右されちゃだめでしょ。私のタロットなんか信じてチャンス逃さないで——」

チャンスを逃してなんかいい。占いで相性が良くないと分かった人と付き合っても、負担ばかりで得るものはないのだから。チャンスと勘違いするところだった落とし穴を、占いのおかげで事前に回避できたのだから、奈緒には感謝するばかりだ。こうやって暗い森をうまく進んでいくことができれば、傷つき膝をつくことも減るだろう。

心配しないで、と奈緒に返事を送った。今日のうちに、後輩にお断りの返事をしよう。なんとなく、暗闇でわき道を見逃したような、香しい花畑につながる道を通りすぎて

くる。

「微妙な結果。でもどっちかというと良くないな」

「……そう、だね」

私たちは夕日を浴びながら、肩間にしわを寄せてうなつた。その後、友人は告白が成功し、タカギ先輩は隠れて付き合っている彼女がいることが判明した。

「奈緒のタロットは、本当によく当たるね」

私がかからほめると、奈緒は視線を斜め下へ落とす。

「タカギ先輩のことは、当たってほしくなかったけど。むしろ、占うんじゃなかったな」

返す言葉が見当たらず、私は窓の方へ顔を向けた。太陽が雲間から、ちらりとぞいでまた隠れた。

「今週のアンラッキーは、ごめんなさい、水瓶座のアナタ。自分を冷静に見つめて。何事も一呼吸置いてから。ラッキーアイテムはスプーン」

今日は社内の空気に落ち着きがない。台風の先触れの風に、森の木々がこぞって枝葉を揺らすように。いつも気取った物腰の係長が、女性社員に愛想ひとつ振りまかず廊下を走る姿を目にした。何かがおかしい。

やがて小声で情報が流れてきた。

「うちの支社、廃止されるらしいよ」

「えっ、じゃあ私たちどうなるの」

翌日、正式に発表が行われた。広島にあるこの支社は廃止。社員の雇用は維持するが、すべて東京の本社へ異動。東京へ移れないなら退職するしかない。社内は混乱に陥った。ツバメのヒナたちが巣で口々に鳴きわめくように、社員たちは不安と不満を口々にぶつけあった。

「あまりに突然だろ」

「東京は遠すぎるよ」

「マイホームを建てたばかりなのに、どうしよう」

「単身赴任するしかないのか」

私も自分のデスクに座ったまま、まとまらない脳みそをミキサーで回し続けていた。昨日からバッグの中に入れてあるスプーンが、財布の金具にカチンカチン当たる音も、もはや耳に入らない。

「朝井さんはどうするの」

隣の女性社員が体を寄せてきた。「私は一度東京で生活してみたかったから、行こうと思ってる」

「私は……」

私も東京に憧れはある。一方で恐ろしさも感じる。昔の友達が何人かあちちにいるとはいえ、それだけのつながりしか持たずにあの巨大な都市に飛びこんだら、そのまま吸いこまれて消滅してしまいうような気がする。若い頃ならそんな冒険も悪くないけれど、三十代になろうというのに無茶をする勇氣はなかなか湧かない。それに島根の実家から、

東京はあまりにも遠い。親のことを考えるとためらってしまう。

だけどこの年で離職して、自分が望むような仕事で正社員の職が新しく見つかるだろうか。非正規しか見つからないかも。給与や待遇が悪くなるかも。それこそ無茶かもしれない。どうしたらいいのだろう。

ほとんど仕事をしないまま、その日の退社時間はやってきた。会社を走り出てすぐ、奈緒に電話をかける。何度かの呼び出し音の後、留守録機能に切り替わった。

「発信音の後にメッセージをお入れください。ピーッ——」

「もしもし奈緒、どうしても占ってほしいことがあります。折り返しお願いします」

携帯電話を握りしめたまま、奈緒の連絡を待った。しかし電話はかかってこない。携帯電話を見つめながら夕食をとり、風呂は早めに切り上げて、携帯電話を手元に置いたまま洗濯物をたたみ、明日の支度をしたが、電話はかかってこない。握ったままベッドに横になっていたら、いつのまにか眠ってしまった。奈緒から連絡はない。巢を荒らされたアリの群れのように混乱を続けている会社に出社する。

「朝井さんはどうするの」

「まだ……決めてない」

「ねえ、昨日からバッグの中でカチンカチン音がするけど何？」

だと思っから」

「前から言わなきゃいけないと思っただけだ——」

深く息を吐きだす音と共に、奈緒の声の音量が急に上がった。

「——もう私は、朝ちゃんの人生を背負うことはできない——」

「え」

すぐには意味が分からなかった。しかし不吉な予感が孫悟空の輪のように頭を締め付けてくる。

「それってどういう……」

「——もうタロット占いはできないっていうこと——」

まわりのものが視界から一気に遠ざかっていった。頭の輪がきつく締めまり、脈が大きく打つ。占いが、できない？ 「な、なんで急にそんなこと。私の人生を背負うとか大げさな」

「——そうなの。タロットの結果は私が意図して出せるものじゃないけど、その解釈は正直なところ、私の考えというか、恣意的って言うの？ そういうのが入ってしまう。どうしても。たとえ私の考えをすべて排除できるとしても、タロットを私が引いているということは変わらない。私の指が朝ちゃんの人生を決めてしまってるのは事実なの。これ以上、朝ちゃんの人生の責任は取れない——」

「責任なんて、そんなの求めないよ。ただ奈緒のタロットは当たるから、進むべき道を教えてほしいだけで」

「水筒に鍵が当たってるんだと思う」

持ち歩いているスプーンは、いったいどういうラッキーをもたらしてくれるんだろう。

夜、やっと奈緒から電話があった。

「息子が熱出して、病院に行ったり大騒ぎだったの。今は少し下がって落ち着いてるけど——」

「それは大変だったね」

「それで？」

子どもが病気の時に、私のためにタロット占いをしてくれと頼むなんて非常識なことだ。分かっているけど、私も進退極まっている。

「こんな時に申し訳ないんだけど……」

私は事情を述べた。「東京へ行くべきか、会社を辞めるべきか、占ってほしい」

電話の向こうが静まりかえっている。

「奈緒？」

もしかして怒ってしまったのだろうか。子どもが病気の時にずうずうしいお願いをしてしまった。

「すぐじゃなくていいから。会社に返答する期限まで、まだ日があるし。だから病気が」

「——そんな大事なことを占いで決めちゃうの？——」

奈緒の声がいつもより小さい。

「……うん。これまでもそうしてきたし、それが一番確実

——それに——

奈緒が肺いっぱい空気を感じ、鋭く出す音がした。
——私はもう、占いを信じてない——

言葉がかたまりになって喉の奥に詰まり、飲みこめなくなった唾液が口の奥にへばりついた。

「信じてない？」

よく当たる占い師その人自身が？

——昔は信じてたよ。だけど結婚して子育てするうちに、占いは意味がないなって、思うようになったの。旦那や旦那の家族とどううまくやっていくか、子どもをどう育てるか、家計をどうやりくりするか、そういうのって、占いに頼ることもできないわけじゃない。占いに任せて自分で考えることを放棄すれば、ラクではある。でもそれって遅かれ早かれうまくいかなくなるよね——

音楽室で、奈緒がタロットをめくる姿を思いだす。うやうやしくそろえられた指先。

——旦那であれ子どもであれ家計であれ、現状をよく把握して、情報収集しながらベストなやり方を考えて、試して失敗するのを繰り返しながら、より良い方向を自力で探さずしかないんだよ。それに気づいたら、占いを信じることができなくなった。ただのカード遊びにしか思えなくなったんだ——

タロットをする前、奈緒は必ず机の上をきれいに拭き、

あつてもどこかに進まなければならぬ。助けを呼んで泣いても無駄に終わるだけだ。

もうろうとしたまま出勤し、もうろうとしたまま帰宅した。頭痛がし、足元が揺れる。今日は早く寝ないといけない。でも眠れるだろうか。夕食に買ったスーパリーの総菜を機械的に口に押しこんでいると、前触れなく一条の光が脳内をかすめた。

「そうだ……ロレーヌ高宮先生」

まだ月曜朝の先生の占いがあるじゃないか。簡単な週間占いでしかないけど、もうあれしか頼るものはない。いや、いっそ先生に直接占ってもらえないだろうか。どこかに占いの店を開いていたはずだ。お金はすごくかかるんだろけど、背に腹は代えられない。先生の店を探すために、総菜をテーブルの端へどけてパソコンを立ち上げる。インターネットを開いた瞬間、検索サイトのトップページに並ぶ最新ニュース記事一覧が目飛びこんできた。

『人気占い師 詐欺で逮捕』

音を立てて唾液を飲んだ。いや、占い師はたくさんいるのだ。まさかそんなはずはない。一覧に並ぶタイトルをクリックすると、記事の本文が現れた。

ロレーヌ高宮を名乗る五十四歳の人気占い師が、占いのため店を訪れた客を「悪いことが起こる」と脅し、厄払いのためとして高額な物品を購入させた。また別の客を自宅

専用の濃い緑色の敷物を広げていた。敷物の四方は金色の縫い取りがしてあり、聖域とも言うべき空間を作りだしていた。

——カード遊びと思いつながら、朝ちゃんを占うことに後ろめたさはあったよ。でもなかなか言いだせなくて。それは本当に申し訳なかったと思ってる——

謝らないで。謝らなくていいから、私の進むべき道を教えて。

——もう占いはしない。もし必要なら、私のタロットは朝ちゃんにあげるから。急にこんなことを言って、ごめんね——

その後の会話はまったく覚えていない。一晩中ベッドに横になってはいたけれど、眠ることはできなかった。ベッドが揺れているような気がした。ハンモックのように左右にゆらゆら。これからは何もかも自分で決めなければならぬ。長いこと奈緒のタロットに決めてもらってきたから、自分で決めるやり方を忘れてしまった。何をどういうふうを考え、どのタイミングでふんぎりをつけるんだっけ。私はこの先どうしたらいいのだろう。自分の手のひらさえ見えない漆黒の闇の森で、ひとり立ち尽くす。手を引いてくれているタロットは、もうない。一歩先にどんな崖や罫や猛獣が潜んでいるか分からないのに、やみくもに進むことなんてできない。けれど、とどまることは許されず、どう

に監禁し厄払いとして覚醒剤を吸引させた上、高額な物品を購入させた。似たような被害を訴える人は他にもおり警察は余罪を……

一時間おきに目が覚めたため、眠った気がしない。目覚まし時計が鳴った時には首から背中にかけてこわばり、鈍く痛んだ。スポンジのようなパンを口に押しこみ、昨晩の総菜の残りも詰めこむ。開けたばかりの牛乳の匂いが、やたら鼻につく。ドアに鍵をかけ、長い根っこを引きずるように駅へ向かった。もうバッグからカチンカチンと音はしない。

微風に揺れる木の葉のように淡々と一日が過ぎた。社内は表面上は少し落ち着きを取り戻したようだけど、たき火の奥に燃え残った小さな炎のように、不安がくすぶり続けている。夕方、タイムカードを押して会社を出ると、空は雲に覆われて小雨が降っていた。今日は狭いアパートで一人ぼっちの夕食という気になれない。どこかの店で他人のざわめきを聞きながら食事をすることにした。

自宅最寄り駅まで戻り、駅近くのそば屋で天ざるセットを食べた。お腹が満足してもまだ家に帰る気になれず、そば屋近くの本屋に寄ることにした。目的もなく雑誌コーナーに立ったけれど、日本語のタイトルや見出しが、まるで異国の言語であるかのように頭に入っていない。東京に

行くか行かないか。決めなければならぬが決められない。奈緒もロレーヌ高宮先生ももういいない。自分で決めなければならぬのに、どうすればいいのかわからない。ハムスターが回し車をくるくる回転させるように、私の悩みも目が回るようなスピードで同じところを堂々巡りする。蛍光灯がまぶしい本屋の店内が、真つ暗闇の森になっていく。私は立ち止まる。どこかにわずかでも助けがないか、四方の闇を見回す。

ふと、斜め前方に「占い」という文字が目にとまった。

占い関連の本のコーナーだ。わらをつかむ思いで吸い寄せられる。そこにはタロットや手相など、様々な占いについての本が並んでいた。何冊か手に取ってばらばらめくる。いまさら何の役にも立たないのだけど。占いすべてが当たるわけではない。奈緒のタロットかロレーヌ高宮先生の星

占いしか、私の腕を正しく引いてくれるものはいないのだ。しかし五冊目に手に取った本をめくるうち、あるページで私の指は止まった。それはいろいろな占いをかわいイラスト付きで紹介している本で、有名なものから外国の聞いたことのないものまで、多くの占いが載っていた。指が止まったのは「辻占い」という占いのページだった。

「つじうらない？」

初めて目にしたそれは、日本に昔からある占いらしい。

「へえ、万葉集の時代からか。ずいぶん由緒ある占いだね」ところに十字路があるのが見えた。

「あっ」

十秒ほど悩んでから、もう少し進んで十字路まで行ってみた。住宅街によくある、普通の十字路だ。車がすれ違えるくらいの道路が四方向に伸び、道沿いは住宅の塀や門、庭や車庫の入り口で埋められている。何軒かの窓には電気が灯っていて、焼き魚の匂いがほのかに香ってくる。小雨で濡らされた道路に、街灯の光が散らばっている。人の姿はない。どうしよう、ここで誰か通りかかるのを待っているか。何時まで待てばいいのだろう。駅までまた暗い道を戻らないといけないのに、こんな危ないことをしているのだろうか。いざという時駆けこめるように、室内に電気がついている住宅の門を背にして、街灯から離れた目立たないところに立った。水を切る音が出て振り向いたら、自転車か滑るように走り去っていった。言葉はない。

「あっ、空を見て」

突然すぐ近くで大声が上がり、電流が走ったように背筋が震えた。父親らしき男性に手を引かれた、小学生の男の子が、斜め上を指さしている。指を追って夜空へ目をやると、そこには大きな月が浮かんでいた。わずかにオレンジ色がかった丸い月は、地球を飲みこもうと近づいてきてい

あ

黄昏時などに辻に立って、通りすがりの人の言葉を聞いて判断する占い。昔は「夕占」とも言った。中国にも似たような占いがあるそうだ。

「黄昏時……」

本屋のガラス壁の向こうへ目をやった。もう外は真つ暗だ。でも「やってみようかな」。手繰り寄せられるように店を出ると、もう小雨はやんでいた。

「辻を探さなきゃ」

どういふものを正確に辻と呼ぶのか分からないけど、四辻という言葉聞いたことがあるから、十字路を探してみよう。駅の方は通行人が多すぎるので、逆方向へ行くことにした。両側に店が並ぶ一本道がしばらく続く。ゆるやかに左右へ蛇行していて、わき道がない。

「辻、辻」

無心に進むうち、いつのまにか店がまばらになり、住宅街に入っていた。街灯はあるものの、あたりは暗く通行人も少ない。

「こんなところ、一人で歩いてたら危ないんじゃないか」

はつと我に返ると同時に、自分がどこにいたのか分からないことがあった。ここはどこだろう。こんな住宅街、来たことがない。駅からどれくらい歩いてきたのだろう。道が蛇行していたから、どの方向へ歩いてきたのかも分か

るのかと思うほど巨大で、まわりの雲を煌々と照らし従えている。

「大きなあ」

「きれいだねえ」

親しい他愛ない会話を交わしながら、十字路を曲がって去っていった。私は月を見上げたまま、動かなかった。

「そういうえば最近、全然空を見上げてなかったな」

毎日、会社と家の往復で忙しく、空に目をやるのがなかった。月ってあんなに大きくて明るいものだったろうか。その存在感に目を離すことができず、全身に月の光を浴びながら見つめるうち、ふと、月の真下に輝く看板に気が付いた。それは駅のすぐ裏にあるビルの屋上にあるもので、驚くほど近くにあった。どうやら蛇行した道を進むうち、駅の裏にまわっていたらしい。あの看板がすぐ近くにあるということは、駅もすぐ近くにあるということだ。長く暗い道のりを戻らずにすむ。ほつと息をついた時、自分が辻占いをしていたことを思い出した。

「あっ、空を見て」

あの子どもの言葉が、辻占いの託宣なのか。空を見た私は、月に見惚れた。忙しくて空に目をやっていたいなかったことに気が付いた。駅までの帰り道を発見した。

「そうか、空を見たらいいんだ」

真つ暗な森で、私は目の前の闇と不安しか頭になくて、

第三回 全国同人雑誌会議



基調講演
三田誠広



発言
中上 紀

全国の同人雑誌諸君！
東京に集まって、
これからの同人誌を話し合おう！
同人雑誌の新しい繋がりと
方向をめざして

講演・シンポジウム・会議・交流会

10月19日土曜日 大田区民プラザ
午後1時30分より 5時より懇親会・交流会
同時開催全国同人雑誌展示会

主催 文芸思潮／中部ペンクラブ

後援 中日新聞・東京新聞・三田文学・季刊文科
参加費1万円（パーティ料含む）

詳しくは6月初旬発行の案内をお求めください。

空に目をやることをしていなかった。空を見上げたら、高くそびえる木々の上に、明るい月が輝いているかもしれない。星々がきらめいているかもしれない。月や星の位置を、占いではなく経験や学習により得られた知識に当てはめて読むことで、自分が進むべき方向が分かるかもしれない。あの星があるから、北はあちらだ、だからこの方向に歩めばいいのだ、などと。

だいたいの方角が分かったら、月の光を頼りに目をこらそう。今まで何も見えなかったのは思いこみで、じっと見つめていれば、ほんやりまわりの状況が見えてくるかもしれない。近くの太い枝を探して折り、前方を叩いて確認しながら進むのもいい。落とし穴や崖に気付くことができるだろう。孤独にくじけそうになったら、星の輝きに心を浸そう。空はどこまでも広がり、私のいる巨大な森を越えて、私が目指すところまでつながっている。

「よし、決めた」

来週、会社に自分はどうするかを伝えよう。不安は森の木々くらい無数にあるけれど、どの道を選んでもそれは同じだ。時々空を見上げながら、ゆっくり歩いていくしかない。ます月の真下にある駅へ向けて、私は一步を踏み出した。

（「安藝文学」87号より転載）

安藝文学



87号



武田純子

たけだ じゅんこ

1978 広島県生まれ
広島大学卒業 会社員を経て主婦
「安藝文学」所属
2012年 庄原文芸大賞受賞
2016年 まほろば賞特別賞受賞
好きな作家は司馬遼太郎、村上春樹、
ガルシア・マルケス、アガサ・クリステ
イーなど